

イムはお茶菓子に合わせたの談話で、一日に欠かせない貴重な半時を共有できる仲間です。

(兵庫県 中尾 徳男)

シベリアの悪夢 (白と黒)

白 (雪原と飢え) 黒 (炭鉱と黒パン)

和歌山県 坂本 清次郎

一、ソ満国境へ (徴兵)

粉雪が吹きすさむ漆黒の夜、軍用トラックはエンジンの音をゴーゴーと響かせて北へ北へと走る。幌ほろを被せた軍用トラックの荷台には、本年度徴兵の青年が整然と並び、座っている。昭和十八(一九四三)年一月十日、現地入営のため、北満の軍都「孫呉」の駅に集合した初年兵である。

約一時間後、軍用トラック十数台は「勝武屯」の地、関東軍第五国境守備隊の衛門をくぐる。孫呉駅にてあらかじめ指示されていた第二中隊の兵舎に案内さ

れ、明るい部屋に通され、初めて隣人の顔をつくづくと眺める。満州開拓青年義勇隊の制服姿、満鉄の制服、満拓の共和服と服装はまちまちであるが、現役兵として現地(満州)徴集の青年ばかりである。夜半と云うのに古兵による汁粉の夜食が提供され、初年兵としての第一夜を藁マットにもぐり、疲れからか熟睡する。

兵営の第一夜を起床ラッパにて起こされ、二等兵としての軍隊生活が始まる。「軍服に体を合わせる」「軍靴に足を合わせる」そんな数日が過ぎると、いよいよ軍事教練が始まる。召集兵のいない現役部隊、それも国境警備という任務なので、当初より厳しい訓練の開始である。

青年義勇隊の准幹部として日常集団訓練を経験している私にとっては、軍隊生活はその延長であり、初年兵ばかりの兵営生活は少しの苦もなく、「軍人に賜りたる勅諭」「戦陣訓」等は入営前に既に暗記し、書くことさえできた。不動の姿勢に始まり、挙手敬礼も義勇隊の基本訓練で鍛えられ、楽しい初年兵生活が始ま

る。しかし、一步兵舎を出れば、同中隊の古年兵、他中隊の古年兵との接触があつて、初年兵としての躰が指摘される。食事あげ、入浴等が一番の苦痛となる。

三ヵ月後、内地教育を受けた長野県の現役初年兵が入隊し、初年兵教育にますます拍車がかかる。基本教練も終了し、いよいよ専門の軍事教育へと入つてゆく。私は機関銃隊へ配属され、他中隊との合同教練に参加してゆく。歩兵銃は扱い慣れてはいるが、初めて見る重機関銃はどっしりと荘厳で、訓練に身が入つてゆく。習うことが新しいことばかりで、その日習つたことはその日に記憶、頭に叩き込まねば次の日の復習で教官、助教より叱責を受ける。機関銃士として重要な四番射手をいつも命ぜられていた。

一期の検閲も間近な時に初年兵の戦友より「俺の兄貴は憲兵下士官で、俺も今度の憲兵採用試験を受験する予定である」との話聞き、「坂本、お前も一緒に受けないか？」と誘われる。憲兵の格好の良さは知っているが、服務内容は一切知らぬがままに班長に憲兵志願を申し出る。

班長は渋々承諾したが、中隊長が「坂本、お前は將來、機関銃の幹部として我が中隊の主力になる兵だ、絶対許さない」と許可が出ない。班長の横田軍曹が夜間、外出許可で中隊長の小山大尉の官舎を訪れ、やつと試験を受ける承諾をもらう。

試験は部隊本部で、数学、国語等の筆記試験と、部隊付将校による面接試験が二日間にわたり施行され、十数人の中から関東憲兵隊教習隊、下士官候補隊への合格を数日後下達される。私一人が下士官候補合格であり、他に三人が憲兵、兵候補に合格していることを知る。

初年兵としての教育期間六ヵ月が過ぎ、一期の検閲も無事済まし、他の三人を引率して連隊長への申告をして、再び軍用トラックに便乗、孫呉駅に着く。孫呉に置く師団隷下の憲兵隊教習隊に行く他の部隊の合格者と合流、新京（長春）に向け列車に乗る。星二つの一等兵であり、満州では真夏を迎える六月である。

二、満州国首都・新京

満州国の首都・新京。緑と広い放射状の道路、その一角、緑園の地に関東憲兵隊教習隊が設営されていた。

昭和十八年七月一日の入隊式を前に、全満に配備された関東軍諸部隊より選抜された候補者が続々と集まってくる。初年兵、二年兵、三年兵もいる。階級も一等兵、上等兵、兵長と、襟章もそれぞれ違う。しかし、入隊すれば皆同じ候補者である。

伊東少佐を中隊長と仰ぐ憲兵下士官候補の第一中隊は、約二百五十人の中隊を編成、一年間の教育教練を開始する。午前中は学科、午後は術科である。憲兵として必須科目である憲法、刑法等の法規、それも日本国と満州国の二国の相違を見極めながら修得してゆかねばならない。教科書の上欄には日本国法、下欄には満州国法という難解な法律用語が並ぶ。教官の一言一言を聞き逃すことなく、真剣に候補者は学習してゆく。

術科は教練、剣道、柔道、馬術等である。約一カ月

を過ぎるころより、候補者の中から原隊復帰を命ぜられる者が出てくる。何が原因か不明であり、区隊長、班長、班付下士官も何も語らない。噂によれば、下士官候補者として入隊した者全員に対する原籍地への憲兵隊による家庭調査、家族全員の前科、思想調査等による、候補者としての欠陥事項のある者ということである。

無我夢中の毎日、暑い夏が過ぎ、氷点下何度の寒い冬が来る。広い講堂はベーチカによって温まっているが、道場は冷たい。服装が違う。特に剣道は冷たい板張りの上を素足で打ち込み、足と手がしびれ、口での気合いだけが大きい。特に術科は、中隊対抗の競技がある。第一中隊は憲兵下士官候補者隊、第二、三中隊は憲兵、兵候補者隊であり、兵候補者中隊に何が何でも負けられない、誇りがある。勢い何事も真剣である。

新京市街を囲む数十キロに及ぶ環状線一周の行軍行事は、中隊対抗の競歩であり、一人の落後者を出しても失格という厳正な規則、完全武装である。軍刀を柔

道の帯で背中に背負い、夜の明けぬ暗がりの中を教習隊を出発したのが今も目に浮かぶ。

満州国軍官学校（日本の士官学校）、満州映画撮影所（所長 甘粕元憲兵大尉）等の見学も、楽しい教習隊での一コマであった。

一年の教育が短縮され、昭和十九年四月二十日、晴れの卒業式となる。関東憲兵隊司令官 三浦三郎中将のご臨席をいただき、関東軍音楽隊の演奏の下、陸軍士官学校の卒業式と同様の形式で行われる。関東憲兵隊教習隊長 堀口中佐の恩情である。候補者数二百一人。新拜命憲兵兵長（下士官勤務）は勇躍、全満十八区の憲兵隊へ、憲兵腕章も新たに、一斉に新京駅を拠点として全満に赴任して行った。

三、興安嶺

感激の卒業式が終わると、各人に対し任地の命令が下達される。私は北満の最前線で、国境では最重要視されているハイラル憲兵隊である。有名な国境の町、満州里街を管轄下に置く憲兵隊であり、ノモンハン事

件の戦闘地ホロンバイルも含まれる広範囲である。

前任者の引率で着任すると、その申告が済むと同時に、各人に対し赴任する分隊名が下達される。私以下五人は免渡河^{グトガ}憲兵分隊である。分隊より命令受領に本部に来ていた永桶軍曹の命令に従い、再び国際列車に乗りチチハル方面に向かい約一時間、野原にある免渡河に下車する。

免渡河憲兵分隊長は印南武雄大尉で、一般部隊その他関連する各関係の部隊の軍紀肅正の他、最も大事な任務は、興安嶺山中に構築中の築城部隊の機密保持と、ソ連よりの防諜であり、約一カ月後にはさらに興安嶺山中にある博克^{ボク}図^ト憲兵分遣隊を分隊に昇格、免渡河より大部分の隊員が異動することになる。新拜命の憲兵兵長五人はもちろん、異動の要員となる。

博克^{ボク}図^ト街は、興安嶺の山頂東に位置する街で、中央を流れる小川を挟んで住宅街、商業地と分かれ、満鉄の機関区があり森林鉄道が通じ、その関連職員が多く、平和な街であった。特色は、白系ロシア人が多く居住していたことである。日、満、朝、ロ、蒙と、国

際色豊かな人種が居住していた。

憲兵隊の任務は、開拓団と称して、興安嶺山中に構築している陣地の防諜である。越境してくるソ連のスパイ狩りである。白系ロシア人の中には超短波無線を極秘に所持する者もあり、斉藤三郎曹長の率いる特高班は多忙を極めていた。

拝命後、庁舎の二階の個室を与えられていたが、庁舎が狭いため、付近の満鉄の社宅を借り上げ、兵長以下上等兵等、その広い社宅の部屋を割り当て、さながら営外居住のような格好となる。

昭和十九年十二月一日付、陸軍憲兵伍長に任官する。

戦局は南方で熾烈な戦となり、軍人の不足を補うため朝鮮人の兵士が生じる。厳しい兵営に耐え得ぬ朝鮮兵士の脱走が頻発、部隊内の規律も緩みがちとなり、これらの士気を鼓舞し軍紀を厳正にするため、憲兵隊に軍秩班が編成され、戦務班（特高班）より移る。高田曹長を長とし、永桶軍曹、坂本伍長の下士官三人と、他は兵長及び兵、計五人。制服が主とした勤務と

なる。部隊編成を主軸にする軍の秩序は保たれているが、その周囲に存在する兵器廠、被服廠等、あるいは陸軍病院等、軍紀の弛緩が考えられる方面より随時取締りを強化してゆく。

昭和二十年の興安嶺の春は遅い。杏の野生の花が美しく、野一面に咲き乱れる頃、南方戦線は劣勢を伝え、沖繩決戦、本土決戦が叫ばれる。白系ロシア人、不良満人の動きが激しいのか、私服の戦務班は夜を日についての繁多な毎日が続いている。

戦局は「我に利あらず」の様相を呈す。昭和二十年八月一日、関東憲兵隊も「全滿特別警備隊」の編成下に置かれ、新しい組織が命令される。「全滿特別警備隊」の編成は、特務機関（謀報担当）、憲兵（防諜担当）、一般兵科（遊撃隊）、第一―三まで編成され、第一―奉天（瀋陽）、第二―牡丹江、第三―齊々哈爾（チヂハル）本部。

関東憲兵隊に大移動の人事が発令される。私は齊々哈爾憲兵隊・免渡河分遣隊への勤務を命ぜられる。ここに同期生はバラバラになり各派遣先へ出発してゆ

く。

私は任官前に、齊々哈爾憲兵隊本部における暗号教育を受けており、常にその受信した暗号の解読に、隊長室の金庫に保管されている解読書を読み、隊長に報告していたが、戦局に対する文章はなく、またソ連に関する暗号の受信もなかった。

四、ソ連参戦

昭和二十年八月九日、宿直下士官に起こされ、約五〇メートルほど離れた分隊に全員が集合する。「ソ連越境 参戦」の報告がある。しかし、至つてのどかな周囲の雰囲気である。国境では壮絶な戦闘が開始されているというのに、興安嶺の山中はまだ実感が湧かない。

当日午前十時の客貨混合列車で、免渡河分遣隊に出発の申告を隊長にしている以上、私は出発することにする。坂本憲兵伍長、石毛憲兵兵長、他に上等兵二人、戦闘が行われている前線に近い場所へ赴任するのである。博克図駅は混雑している。婦女子を後方へ護

送する列車の配備状況を、各方面からの連絡員が聞き合わせに殺到している。列車の最後尾のデッキに立ち、見送りの部下、街の知人等に最後のお別れをする。後刻どのような状況の変化があるか本人も知らない。列車は西へ西へ、国境へと走ってゆく。着任した免渡河憲兵分遣隊は、さすがに混雑していた。着任の申告をするにも分遣隊長新田准尉は、免渡河一般部隊との連絡のため不在、前任下士官松浦軍曹に申告、ひとまず宿舍に入る。

分遣隊長が帰隊した一時間後、事態は一変する。憲兵隊は免渡河一般部隊と行動を共にする。直ちに重要書類等を焼却、隊員は完全武装をもって一般部隊と合流、興安嶺山中に構築した陣地に軍旗を奉じて配置につく。着任したと思えば早々の出陣となる。隊の中庭に山と積まれた書類が灰になってゆく。「何も書類を運び出す必要はない。隊舎に火をつけて焼け、宿舍にも火をつけよ」と大声で兵に告げる。

隊長以下、一装（新品）の軍服で、隊長は馬、下士官は自転車、兵は徒歩と部隊に合流のため、火勢の衰

えぬ隊舎を後にする。今後の食事等、また日用品等は
どうなるのか、そんな思考をする暇もない。興安嶺の
陣地に入れば死あるのみとの覚悟である。黙々と歩く
兵、一般部隊は、秩序正しく四列縦隊となつて整然と
中央を歩く、その両側を関連部隊が雑然と三々五々行
軍する。

夏の長い昼が過ぎ、太陽のない暗がりの道、自転車
行軍は歩くより忍耐力が要る。道路が整備されていな
いためである。二、三時間も歩いたか、「一般部隊は
大分後方である」と言つてトラックが走り過ぎるが、
次のトラックが、憲兵腕章を見て停車、「乗つて下さ
い、一緒の陣地へ行きます」。隊長は助手席へ、下士
官、兵は荷物を積んだその上に乗せてもらう。馬は放
馬、自転車は道の側溝へ置く。渡りに船であり、一
同、顔を見合わせて笑う。

翌日、割り当てられた陣地内の宿舎から外に出る。
近くに軍旗奉安所があるのか？ 着剣した衛兵が厳然
と立哨している。半地下の宿舎は電気もあり、食事も
変わることなく、「別命があるまで宿舎にて待機せよ」

との隊長命で終日ベッドに横になる。前線では激しい
戦闘が行われ、尊い生命が失われているだろうに、と
歯を食いしばる。部隊の動きもない。「静」だ。二日
間、無為無策のうちに過ぎる。

「連絡がようやくできた。これより博克図憲兵隊に
帰隊する」との新田准尉の言葉は隊員に喜びを与え、
また元氣が出る。部隊が用意してくれた自動車の荷台
に再び乗り、一路山間部を東へと走り、博克図の街へ
入る。

憲兵隊の建物は変わりようもないが、分隊長が新し
く着任し、齊々哈爾本部に出張中の准尉下士官が、海
拉爾憲兵隊に帰るべく乗車した列車が博克図駅で戦局
のため動けなくなり、そのまま博克図憲兵隊に勤務す
る異常事態となり、未知の下士官がいる。

「士気を昂揚せよ！」との隊長の指示で騎馬巡察に
出る。制服姿で馬に跨がり、兵長と二人、街に出る。
平和で楽園に等しかった街は一変し、男子は鉢巻き姿
に、腰に日本刀。街角には日本酒の四斗樽が抜かれ、
道行く人たちが氣勢を上げている。無腰の日本人には

日本刀を進呈している。女子はモンペ、エプロン姿で炊き出し等に従事。満人の姿は一人も見かけない。騎馬姿を見ると一齐に「万歳」を叫び、「頑張つて下さい」の聲が飛ぶ。意気天を突く有様である。

私服の戦務班（特高）は、他の応援を必要とするほど多忙を極めていた。白系ロシア人の動向、満人の不良分子の始末等である。ソ連参戦の報とともに一齐に姿を消したグループもある。隊内の留置場は満員となる。補助憲兵の通訳は右往左往している。

憲兵隊に勤務していた憲兵補（朝鮮人）、憲補（満人）は逸早く、ソ連参戦と同時に隊長の恩情で退役となり、庶務係より余分の金銭あるいは物資をもらい、家族と共に街より去って行った。同朋の復讐を恐れたためである。

一睡もできぬ毎日が続く。ある夜、戦務班の騒ぎに部屋を覗くと、机の上に短波無線機が無造作に放り出されている。どこから持って来たのか？ 持ち主はどうなったのか？ 推察はできる。班員はまだどこかへ出ていく。

五、終戦

十五日正午、重大放送がある旨の連絡を受け、隊長はサイドカーに乗り、博克図駐屯の主力部隊に出てゆく。白系ロシア人、満人の動向がおかしいとの情報が入り、隊員全員、隊内に待機の状況で隊長の帰り待つ。炊事の用務員として雇傭していた満人が、昼食の炊き出しをして姿をくらます。いよいよ覚悟を決めねばならぬ時が来たのを全員が察知、僅かの身の周りを整理する。時計の針が回ってゆく。隊長が悲愴な面差して帰隊。講堂に全員集合。

「天皇陛下の御命令により、ボツダム宣言を受諾。日本は降伏し、戦争は終結した。我々博克図憲兵隊員はただいまより齊々哈爾憲兵隊に合流、その命令下に入る。なお、戦争は終わったが、完全武装でトラックに分乗、直ちに出発する」

隊員の家族は既にソ連参戦後、後方に移動し、単身の男子ばかり。荷台にまず食料が積み込まれる。砂糖のマータイ袋を積んだ途端、罵声が飛ぶ。「砂糖より塩が大事だ、先に塩を積み」。運転士は阿部軍曹であ

る。初年兵当時、自動車部隊での訓練を受けており、ガソリンは満タン、荷物の上に座り出発間際、どこに潜んでいたのか白系ロシア人の青年二人が厩舎に入り馬の手綱をとって逃走する。放馬しておけば良かったと悔やむが後の祭り。厩舎もいずれ荒らされるであろうと、皆、名残を惜しんで小高い憲兵隊舎に別れを告げ、駅前下って行く。在留日本人は大半は齊々哈爾方面へ避難して不在である。

街の中心街を見ると、中央を流れる川の畔に面し満人が整然と並び、その中央には壘一枚もある大きな赤旗が掲げられ、ソ連軍の入って来るのを待っている。四囲の山陰には火を放ったのか、関連部隊の焼ける煙が立ち込めている。どこから来たのか、戦車が無残な姿で傾いている。

夏の可憐な草花の咲く草原をトラックは一路、齊々哈爾市目指して走る。途中、ガス欠で停車した乗用車の側に立ち「兵隊さん、ガソリンを分けて下さい」と言う朝鮮人の一団に手を振られるが、目をつぶって通過してゆく。故障した自動車が置き去られている。

乗っていた人たちはどうなったのか？ 敗戦の悲哀をいやというほど思い知らされる。堪らなくなった某軍曹が手榴弾を荷台から草原に向け投げる。ドドンと爆発する音を後方に聞き、一同やっとなぜ下ろす。

騒然とした齊々哈爾憲兵隊本部に着いたのは夜である。まず落ち着くべき宿舎に入る。市街も混乱の中にあり、「憲兵伍長以下は市街の治安に勤務せよ」との命令を受け、方角も定かでない市内へ制服姿で巡察に出る。齊々哈爾駅は避難民で足の踏み場もないほどである。近郊の開拓団の家族たちであり、男は召集され不在。そこへ終戦の報。老人、女子、幼児等の群れである。避難の途中、略奪、辱めを受けた者、女子は裸の上にドンゴロスの袋を頭から被り、素足である。こんな悲痛な状況を見たこともない。幼児は腹を空かし、泣く声もない。老人たちは床に腰を下ろし、頭を垂れたままである。軍服姿に軍刀の自分の方が惨めである。慰める言葉もない。将来いつかは自分もこんな姿になるとは想像もできない。一日も早く避難民の収容所を設営し収容され、ひとときの間でも安眠できる

ことを祈る。

齊々哈爾の軍団司令部は逸早く南下し、在市の最高司令官は憲兵隊長の玉岡巖中佐であるが、部下に自重する旨の命令を下して、みずから従容として自決された。

ソ連軍が齊々哈爾市に進出するに際し、松花江^{スنگハリ}北岸において日本軍との会談を要請し、元齊々哈爾憲兵隊戦務課長、印南大尉が軍使として出発したとの報を聞く。関東軍の敗北であり、憲兵隊の終末である。

「憲兵さんが忠霊塔の前で死んでいる」と在滿邦人より連絡があり、四、五人の隊員が飛び出してゆく。「誰だ」「誰だろう?」と、皆首をかしげるが、不明である。

運ばれてきた遺体は、私たちの同期生である北川誠八郎憲兵伍長であり、忠霊塔の前で壮烈な手榴弾による自決である。ソ連軍による捕虜の辱めを、自決を以て否定したものと思われる。

「ソ連軍、齊々哈爾市入城」の報が流れる。まず武装解除があり、次いで戦犯の捜査が始まるだろうことは予想される。日本軍の儀表兵科として誇りの象徴と

していた憲兵記章をまず外し、憲兵腕章を取り、焼却炉に投げ込む。残念の氣、今も残る。戦勝国ソ連軍の処置は早い。高級将校はどことも不明の場所に移され、他の将校は憲兵隊の留置場に入る。皆、丸腰である。

下士官も、九日のソ連参戦以来、各自所持していた日本刀の柄に白布を巻き帯刀していたが、ソ連軍に渡すことは日本刀に対する侮辱と考え、ある者は自慢の刀の切れ味を試み、ある者はまたこの地に帰った時のことを考え、秘密の場所に隠す等、それぞれ始末をし、官給の軍刀が部屋隅に積まれた。

「下士官以下集合」を命ぜられたのはその直後である。本部前に整列。ソ連軍が前後左右を、「マンドリン」と称する自動小銃を小脇に抱え、どこへとも言わず、薄暗くなった齊々哈爾の街を歩き出す。齊々哈爾の市街に詳しい下士官によると、松花江に向かっているいうことである。「松花江の橋の上で、一斉射撃で全員を射殺、死体を川に投げれば後始末をする必要はない。皆、覚悟を決めておけ!」と流言が飛ぶ。

どこをどのようにして歩いたか、不明である。真つ暗闇の中の行軍。休んでは歩き、歩いては休み、監視のソ連兵にも余り緊張感がない。ふと見ると、隣の岩田伍長が休みを利用して隅の方にいざり寄り、ソ連兵の油断を見すまし木の陰に隠れる。逃亡である。出発の際、人員の点検もせず、警備のソ連兵も、一人や二人いなくなっても何ら責任がないのだらう。

松花江の橋が見えてくる。ソ連の戦車がゴゴゴとキャタピラーの音を響かせて、後から後からと車体の割に太い、長い砲門を正面に向けて走ってくる。その脇を乞食こじきのようなポロポロの服を着た若い、幼い顔をしたソ連兵が歩いてゆく。「オイ、皆、離れないよう、しつかり隊伍を組め。手を繋げ、離れると殺されてもわからないぞ」と誰かの怒鳴る声が聞こえる。いよいよ正念場かと覚悟を決める。案に相違して無事橋を渡り終え、次の満人部落に収容される。夜が明けると、お互いに顔を見合わせ無事を喜ぶが、「誰がいない」「誰々も不明」と五、六人の逃亡がわかる。

飯盒炊飯が始まる。各人持参の米とて、二、三回も

炊けば終了である。後は何とかなるであろう、松花江で死んだと思えば楽なもの、皆、自分の運命を諦めている。幹部は満人の宿舎に入ったが、入り切れない下級の下士官、兵はその庭で露営である。何もするとはなく、食べることだけが一日の仕事となる。夜が来る。脱走する者もない。

残った者は、運命を共にする固い戦友魂か、あるいは一人で行動のできない精神の持ち主である。米がなくなると乾パンの支給がある。主計下士官が全員を集め、持参していた大きな鞆から幾束かたくさんの紙幣を出し、階級に応じた金額を支給してくれる。しかし通用するか、疑問である。終戦前であれば大したもの、皆、ありがたく受領したであろうが、今は無用の長物か、くれる物はいただいておけの調子。ソ連兵の監視も厳しいとは言えない。集団より離れる者がいないと確信したのか、気楽にマンドリンを手に合唱でもしている。

二泊三日後の朝、「全員整理」の号令がかかる。まだどこかへの移動か？ 持つような荷物はな。雑糞

に入れた日用品、飯盒、それだけである。腹だけが減り、歩く足にも力がない。再び松花江の鉄橋が見えて、渡る。白昼、よもや銃殺はないだろう、これが昔の日本憲兵かと思われるゾロゾロとした歩きである。着いた所は航空隊の兵舎である。「下士官の方は狭いですが下士官室へ」「大半が下士官です、下士官室は不要です。ぜひ一緒に入れる部屋をお願いします」

案内されたのは、体育館のような天井の高い板張りの床、広い部屋で、全員がまず横になる。ここでは旧軍隊のように炊事場からの食事が少ないが給与され、また何の目的もない生活が始まる。人員の点呼もない。横に寝ている戦友だけ確保しておけば良い。部屋の隅に寝ていた者が、脱走しようと一晚二晩不明になるうと、我、関せずである。

部隊に置いていた野球道具を見つけて、広い練兵場で野球を楽しむ者が出てくる。他の兵舎に収容されていた一般部隊にも野球チームができ、対抗試合をしたり、至ってのんき。他の部隊員も憲兵ということを知らない。一日も早く祖国へ帰る日を祈る日々である。

日本の家庭が恋しい。

ソ連侵攻後約一カ月の九月中旬、作業大隊の編成が命令され、その人員の割当てが憲兵隊にも来る。新田准尉以下約三十人。私もその一員に入る。

宮原五郎助少佐以下千五百人の作業大隊が集結したのは、齊々哈爾の某部隊の営庭である。「指揮班長を出せ」と言われ、私が指名され、戦友と別れ、作業大隊の誰も知らない指揮班へ移動する。

部隊の下士官、兵は皆、それぞれたくさん荷物を持っている。羨ましいほどの私物である。一方、私たちはほとんど手ぶらである。雑嚢の中は飯盒、日用品、箸箱ぐらいで、手軽な服装である。行軍の末、貨物線に停車している貨物車に乗り込む。規律のないように見えるソ連兵も、日本兵の輸送ということで大きな声で連絡を取り合っている。言っていることがわからない。ただ、怒鳴る声が厳しく聞こえる。

教習隊の正規の学科に、語学として「満語」「ロシア語」があり、私は満語を選択していた。ロシア語を習得しておけばよかったと後悔大である。

「ダワイ」の声とともに、日本兵に対する略奪も始まる。主として腕時計、万年筆である。日本兵としては生活必需品であるが、ソ連兵にとっては宝石と同じである。彼らの周りにまた、ソ連軍の女子兵士がまわりつき、略奪した腕時計、万年筆を「くれ」とせがんでいる。しかし、時計の時間の見方も知らず、ただ持っていることが誇りであり、片腕に必ず二、三個の腕時計を巻いている。

有蓋貨物車は扉の中央を空け、左右には二段式の上下の座が設けられ、座っていっぱいになるほど積み込まれる。身動きもできない。荷物の多い兵隊は、荷物の置き場所の確保が難しい。指揮班は貨物列車の中央部の一両の上段に位置し、数個の将校行李こうりを委託され、狭い上にますます狭い。窮屈だ。乗り込んだが、貨車はなかなか動かない。

貨車の一段に約十人として左右、二段で四十人、扉の中央に十人、一両約五十人。三〇両編成の大移動である。兵隊たちはこの貨車で「日本へ帰れる」「美味い物が食える」と賑やかに雑談している。

しかし、乗車前に支給された冬季の下着類等はなぜか？「故郷へのお土産さー」と至ってのんき。まるで慰安旅行に行くような雰囲気である。連結器がガチャンガチャンと無気味な音をたてて大移動が始まる。貨車が動き出すと、さすが兵隊たちも静かになる。

速度は遅い。昂昂溪キョウキョウキの貨物線に入って停車する。運命の分かれ路である。東へ動けば哈爾濱經由帰国の途へ、西へ乗り入れれば満州里を経て入ソということになる。部隊の兵隊にはわからない。どこかの召集兵か、年配者の二等兵、上等兵が多い。貨物廠を中心とした作業大隊ということは聞いていたが……。将校たちは本部貨車に乗っている。貨車列車は昂昂溪より西へ乗り入れる。帰国の希望は無残に絶たれた。勤務地の博克図、海拉爾方面へと貨車はノロノロ走る。

国境へと貨車が動いていると察知した兵隊たちは何を思い、何を考えているのか。「満州里、海拉爾方面の陣地であった激戦の戦場掃除に行くのだ。ソ連、日本軍、共にたくさんの方々が死んだ由、その死体収容

の使役に行き、終了後、日本へ帰国するのだ」と祖国日本への帰国の念を捨てない。「班長殿、ご意見を聞かせて下さい」と迫る。「俺には何もわからない。今度ソ連の監視兵が来たら聞くことだな」ととぼける。

夕闇が迫るところ、懐かしい博克図の駅に停車する。

長い時間の停車である。この駅を出れば列車は興安嶺にかかる。山岳が険しいため、汽車は一息で登り切ることはできない。そのため応援機関車を待つ時間であらうと推察する。

憲兵隊の作業隊員が別の列車に乗り、お互いに和気藹々のうちにこの列車の運命を話しているだろうにと、指揮班に指名されたことを恨む。夜半、貨物列車の長い列が動き出す。北滿の軍都、ソ連軍との激戦地、海拉爾憲兵隊の本拠地、多くの先輩及び家族が戦死、自決した海拉爾は僅かの停車時間で、貨車の長い列は国境の街、満州里に着く。ここを走り抜けるとソ連領ということになる。

満鉄は狭軌道、ソ連領内は広軌道と思う。その列車

の線路の幅の違いをどのようにして修正するのか？内地帰還の夢は遠い遠い幻となる。列車内は静寂そのものである。列車内から外を覗くと、さすがにソ連兵が多い。右往左往して連絡を取り合っているのか、日本兵の姿は一人も見当たらない。

六、入ソ

「ガタン」という音を残して、日本兵千五百人を乗せた貨車列車は国境を越えるべく動き出す。「日本よ、さようなら」「満州もさらばー」心配した軌道の幅も関係なく列車は国境を越える。昭和二十年九月二十日である。

ソ連領に列車が入ると、監視のソ連兵の態度が一変する。一日に当初三食あった給与も二食になる。列車は走りながら炊事班が食事をつくり、時間がくればどこであらうと列車をとめて食事の分配がある。その時間帯が、列車に閉じ込められていた兵隊の解放時間である。列車と列車の間、草むらの陰に用便のためしゃがんだ姿が多く見られる。少しでも遠くへ行こうもの

なら、ソ連兵の叱咤と同時にマンドリンが向けられる。

この種の停車時間が一番危険であることがわかる。

停車した付近の住民のソ連人が列車内に入り略奪を始める。監視兵に訴えても知らぬ顔である。どこだったか、満州里を過ぎて一日目くらいか、私の履いていた長靴を盗られ、指揮班で預かっていた将校行李を開けられ、下着等の盗難に遭う。捕虜に近い身分、致し方のない自分を責めても慰めにもならぬ。騒ぐ兵に「皆、貴重品は身に付けよ。出入りの扉は食事、用便等、人が通れるくらいに開けて、その他は絶対に開けるな」と指示する。

列車内で幾晩寝たであろう、暗い列車内で話し声もだんだんと小さくなってくる。「おーい、美しい湖だぞー、大きいぞー」の声に、ウトウトしていた目をあける。列車は湖に沿って走っている。漁舟も見える。湖と森林の調和のとれた風景、正に一幅の水墨画である。地図で知っているバイカル湖と確信する。湖畔で約一時間くらいの停車がある。漁夫が、採れた魚を監

視兵に渡している。監視兵はその魚を頭より口に入れて食べている。まるで魚の踊り食いであり、びっくりする。

入ソ後あった略奪は、日本軍の強い要請があったのか？ ソ連兵の自粛か？ 貨物列車内への侵入はなくなったが、下車の際の一人ぼっちは危険である。いつ襲われるかわからない。生理的な便意も、恥ずかしいが皆で並んで足すようにする。恥も外聞もない。

列車はバイカル湖畔を巡るような形で走る。走っているうちが一番安全である。二段の上下に関係なく話が弾む。故郷の話、家族の話、各地の名物、うまい物の話、原隊での苦しかったこと、嬉しかったこと等々。自分がソ連軍の捕虜であることを忘れての一時であるが、給食がだんだん、日一日と少なくて悪くなつてゆく。致し方ないと割り切るが、腹はそうはいかない。こんな時、悪知恵が働く。給食の停車時、物珍しそうに見物に来ている農民に時計、万年筆を見せ、パンや食う物との物々交換である。監視兵も農民が近くのを知らぬ顔で見過ごすが、日本兵が進んで農民に

近づく」と「ダワイ」の怒声が飛んでくる。一日何回かの停車時にはこのような風景がよく見られた。

夜とも昼ともわからぬ、また日付も不明の何日かが過ぎてゆく。大きな街に列車が入り、郊外と思われる引込線に停車する。クラスノヤルスクである。約半日の停車、貨物列車は今度は南へ南へと走る。いつ、列車はどこへ着くのか？ 降ろされた後はどうなるのか？ わからない運命を待つ。

本部通訳として乗車している某憲兵軍曹の言によると、ソ連の輸送指揮官は決定的な終着駅を知らない。「B地点まで行き指示を待つべし」、B地点に到着すると、「C地点まで輸送すべし」との命令で、指揮官すら知らないとのことであるが、団体行動であるという一種の安堵感があつた。

南下二日目の夕刻、列車は貨物専用線に入り「全員下車」の命令が下りる（いつか祖国へ帰る、その日までの仮の住所、チャイナゴールスカヤ駅である）。「何かわからぬ運命の刻が来た」と真剣な顔で一同整列、久しぶりの戦友の顔を彼方に見て、思わず微笑む。少

し冷たいが外の空気を存分に吸い込む。幾日間列車に乗っていたのか？ 今日は何月何日なのか？ 記憶にない。線路のそここに石炭が野積みされ、炭鉱の街であることがわかる。

誰かの声で「九月二十七日」と下車の日付が知れる。二週間余もの長い間、あの狭い窮屈な貨物列車の上下二段の居住によく耐えたものと、我ながら感心し、乗って来た列車を振り返る。兵隊たちも感慨深げに見ている。

行進が始まる。いつまでいるかわからぬ街外れを、少しは解放された気分になったのか、声高の話し声が聞こえてくる。「オーイ、刑務所みたいな建物が見えるぞー」に、一斉にその方向に首を回し、顔を向ける。高い望楼、有刺鉄線を張り巡らした柵。望楼の中にマンドリン銃を持ったソ連兵が、日本兵の縦隊に銃口を向けている。「アアー、遂に捕虜になったか」「逃亡した同期生、部下たちは今ごろどうしているだろうか」「内地へ向け徐々に進んでいるか」等の悲哀感が頭をよぎる。憲兵として深く自決した北川憲兵伍長の

死が頭に浮かぶ。なぜ、今ごろ、どうして自決の様子
が頭に浮かぶのか？ 今さら戦陣訓のせいでもあるま
いし……と、二、三度頭を叩く。

七、収容所へ

収容所の正門前に四列縦隊で整列する。肩章を付け
たソ連軍の士官、マンドリン銃を持った下士官が列を
囲むようにして並ぶ。日本軍の通訳の下士官が「五列
に並び直して下さい」と声高く指示する。「ソ連軍は
五列縦隊が正規か？」誰かのひとり言である。

人員の確認が終わった中隊から、宿舎であろう半地
下の家屋へマンドリン兵が案内する。細長い家屋で、
真ん中に幅三メートルくらいの廊下が通り、その両側
に部屋が分かれて入り口の扉がある。部屋は十畳くら
いか、両側に二段ベッド二列、正面にも二段ベッドが
あり、ベッドに十人が就寝できる。真ん中の広間に四
人、計十四人の寝室となる。日本兵の来る前に塗った
のか、白い石灰の匂いのする塗料が壁板、扉と言わず
塗られている。まず先任順の高橋軍曹より寝台を決め

てゆく。下士官がベッドに、兵長、上等兵が広間に就
寝することになる。簡単な夕食が出る。高粱飯と具の
ない食塩汁である。

各人が大事に持ってきた飯盒の中蓋に飯を盛る。飯
盒が、帰国するまでの何年間もの生活必需品であるこ
とは、今は知らない。

板張りベッドの上に毛布を四ツ折りにして細長く敷
く。この毛布も厳冬になると切れ、チョッキになつ
たり、靴下になつたりして、帰国の時は形もなかつ
た。雑囊を枕にして横になる。体がまだ汽車に乗つて
いる錯覚を起こし、揺れているようで眠れない。ソ連
領に入って初めてのベッドでの就寝であるが、何か眠
れない。

そのうち、体の手足の末端から何か痒い！ 虫が
這っているような気が、寝惚けた頭を刺激する。幸い
に薄暗いが電灯がついている。ベッドに座り痒い所を
見ると、赤い斑点が無数に連なつてでき、無性に痒
い。ふと横の板壁を見ると、赤い小さい珠のような虫
が無数に這っている。指で押し潰すとプスーと音を立

て、吸った血を飛ばして壁に赤い色をつける。上方のベッドを見ると、厚海伍長、岩崎伍長も一生懸命虫を潰している。南京虫だそうで、初めて見る。一晩のうちには石灰で白く塗られた板壁が、赤い斑点、線で汚されてしまう。以後、毎晩この南京虫の出迎えに悩まされ睡眠不足となり、その対抗手段として手袋をはめ、靴下をはき、その接点を紐でしっかりと結ぶという者も現れてくる。「住」はこの侵入者さえなければ、まあまあ眠られぬことはない。

「食」の方は、宿舎に落ち着いてから一変する。黒いパン食になる。パンと言えば白く、指で押すとへこむ軟らかい物と思っていたが、ソ連より支給される黒パンはこの常識を全面的に覆すものである。色は赤茶黒い、重い、ジトジトと湿っている、酸っぱい。

この黒パンが一日三〇〇グラムの支給と決まる。重いパンだから、三〇〇グラムといえは嵩かさは本当に小さい。手の平に乗るくらいである。味噌汁も岩塩汁もない。一度に食べてしまいうる量であるが、一回に食べてしまうと一日一食となり、他の人の食べるのを横

目で見ていなければならない。我慢、辛抱である。我が部屋では兵隊が小まめに働いて食事上げ、使役等をこなしてくれる。

小さい黒パンは食事当番が取りに行き、入り口に近い部屋に陣取った中隊本部の下士官によって各部屋ごとに分けられる。そこで兵隊同士の「食の葛藤」が始まる。食事当番に「こつちが小さい」「切り方が悪い」「パン屑を余り出すな」「出たパン屑はこの小さいパンの上に乗せる」云々。言う者も言う者であるが、言われた兵隊は腹が立つ。そこで工夫されたのが天秤てんびんである。もちろん、兵隊の手製であるが、糸を使って面白いくらいよくできている。「窮すれば通ず」感心し、面白く分配を見る。私の部屋ではこのようないざこざはなく、下士官たちは皆紳士である。

「衣」は着たきり雀であるが、まあまあ何とかなっている。

衣・食・住が足りて、そこに排泄の大原則が必然的に起きる。収容所は緩やかな斜面の一番下に建設されている。その一番高い丘に並行して幅約五〇センチの

深い壕を掘り、そこへ板を渡す。その板に跨がり座つて用を足す。もちろん、四囲の囲いもない青天である。当初、使用するのに足踏みをしていたが、生理現象は否応もなく起こってくる。使用せざるを得ない。

内向的な者は夜の暗くなるまで我慢するが、下痢等を伴うと大変である。宿舎より便所まで約七、八〇メートルの丘の登りを走って行かねばならない。こんなことにも健康の二字がいかに大変か、痛感させられる。

収容されて落ち着いたと思つた途端、監視兵の荷物検査がある。全員、宿舎前に集合させられ、座らされる。十数人の監視兵が宿舎に入り、各人の荷物を立ち会いなしでひっくり返し始める。僅かの荷物を整頓し、大切に使用していた品物類が監視兵によってあばれる。兵器、危険物、大きな刃物等の検査であるが、余得として荷物の間に保管していた時計、万年筆等も没収される。入室に際しては、また一人一人の所持品検査があり、荷物がまた少し減つてゆく。

私たちはあくまでも一般兵科の下士官、兵であり、憲兵の言葉さえ言わぬように戒め合い、関連する一切

の物品は齊々哈爾で一般部隊に収容された時点で廃棄していた。編成された作業大隊でも、幹部も知らず下士官の多い部隊という事で通つていた。

作業のない、食事の少ない半月も過ぎたころ、中隊長柿崎中尉の発案で演芸会が開催されることになる。真ん中の廊下の奥に机を置き、各部屋の扉を開け聞こえるようにする。声だけが聞こえるため、最初の演芸会は歌謡曲等に限定される。私の部屋からは高橋軍曹が皆の推薦で出場する。博克凶憲兵隊に在任当時は、隊内の演芸会ではいつも歌う美声の持ち主であり、また隊長が、白系ロシア人工作のための宴会等にはいつも随行を命ぜられ、日本の民謡等を歌つていた経験の持ち主でもある。捕虜として他国のソ連の僻地に抑留されている者にとつて、高橋軍曹の民謡は、祖国を思い、故郷を偲び、大いに喝采を浴びた。

収容者の内に浪曲師がいることが判明し、中隊長命令で土曜日から日曜日の夕食後「一席」唸ってくれることになる。演題は演者任せと決まる。浪曲界に入り日がまだ浅く、やっと前座を勤め始めたというが、素人

の我々が聞くと、大浪曲師と同じ節回し、演題も豊富で、我々に馴染みの「佐渡情話」「清水次郎長外伝」「紺屋高尾」等々、良く召集兵の内にてくれたものと感謝する。中隊長も浪曲が終わると、この召集兵に「腹が空いただろう、浪曲を喰るといふことは力が要るものだ」と、物々交換でもして仕入れた白いパンやその他の食品を食べさせていた模様である。

「働かざる者は食うべからず」のソ連で遊ぶはずがなく、着々と作業への準備を整えていたようである。健康診断のあったのはそんなある日である。日本人軍医の聴問、形ばかりの触診があり、最後にソ連軍の女医の前に禪一つで立つと、全身の前を見、後ろを観察、肉付きを見て「ビシヤツ」と尻を叩き、「一級」「二級」「三級」と決定してゆく。まるで牛肉の卸市場と一緒である。ここに捕虜の悲哀を知る。

一、二級は重労働、三級以下は所内作業と態勢は整い、作業開始は間近である。その間、特技の調査があり、入営前に在職した大工、左官、指物師等は建築班へ、理髪職は抑留者の散髪係、給食関係者は炊事班等

に指名され、喜んで往時の職につく。私らは皆現役で、またその中より選抜された下士官、兵で、虚弱な者はいない。全員、重労働の組へ配置される。どのような作業が待っているかは不明である。

八、作業開始

朝食後、作業班に「整列」の号令がかかる。收容所の正門を出るのが一苦勞である。引率のソ連兵が人員を点検する。五列縦隊である。五、一〇、一五と口でつぶやいて数えている。一回、二回。今度は衛兵が数える。総人員が合わない。頭の程度がわかる。

やっと「前へ進め」の声がかかる。ダラダラ歩きである。広い広い原野の中に建つ山小屋でスコップと先のとがった鉄棒を渡される。作業開始である。広野に長い長い縄が張ってある。幅一・五メートルほどで約五メートル間隔に赤い印があり、ちょうど長方形の枠を形成している。そこを掘るのである。深さ約二メートル、一枠に兵隊五人ほどが班をつくり、そのノルマに挑戦する。地の表面はスコップが入り掘りやすい

が、深くなるほど固くなってくる。凍土（ツンドラ）である。鉄棒を渡された理由がわかる。交代しながら鉄棒でコチンコチンと砕いてゆく。一〇センチを掘り下げるのも大変である。

一時間ごとに約一〇分ほどの休憩の指示が出る。昼食の時間が来ても食べるパンがない。朝食時に渡された昼用の小さい黒パンは既に腹の中に収まっている。工事に従事している民間のソ連人が焚き火をしてお茶を沸かしている。そのお茶が腹の虫を抑えてくれる。

監視兵が作業状況を見回りに来るが、余り口うるさいことは言わない。ただ逃亡のないよう警戒しているだけである。「この穴、何のための穴だろう？」との一人の問いに「石油を運ぶパイプの穴さ」「電線を埋めるための穴である」と、もつともな答えが出る。

毎日の穴作業が続く、シベリアの冬は早い。朝夕冷たいと感じた頃は白いものが天から降り始める。作業は遅々として進まない。ノルマより我が身が大切である。マッチを持っていた兵がおり、穴の中で枯れ木を燃やすことを思いつく。暖もとれるし凍土が軟らかく

なる。一石二鳥である。穴から煙が出るが、監視兵はただ黙って見過ごしてゆく。着たきり雀であるが、出発前に渡された防寒衣類が、今ここに生きてくる。しかし飢えと寒さが年老いた召集兵に大きな負担としてのしかかる。死亡者が出始めたのは冬將軍が本格化した始めたところからである。

九、栄養失調による死亡

作業に行くために整列し、行進が始まる。ふと前を行く老兵の首筋を見る。首筋が細く二条の筋が出て肉がない。軍袴を通して見ると尻の肉がなく、ダブダブである。明らかに栄養失調である。歩く足がもつれるようで力がない。それも一人や二人ではない。年長者が多い。南方へ転出した強力な関東軍の後に補充した満邦人最後の召集兵たちで、四十歳以上の力仕事をしたことのない兵である。社会人の頃は良き平和な家庭を持ち、会社では上席に座り、部下を指導し叱咤していても、召集され軍に入れば一兵卒である。

終戦、捕虜、シベリア抑留、強制労働と、精神的、

肉体的に負け、一日一口が苦痛の中に生きて、よく今日までと思えるような飢えとの戦いの毎日である。

作業に行く進行中の出来事が今さらのように思い出される。監視兵を先頭にゾロゾロと歩く日本兵士。物珍しそうに集まるソ連の住民。「ソ連邦」の名の如く、たくさんの民族の寄り集まりである。また、流刑された人々も居住しているそうである。同情か？ 擲^ヤ擲^キか？ 住民の中からジャガイモの屑、キャベツの葉っぱ等が投げられる。飢えと戦っている老兵たちが我先にと列を乱して拾いに行く。手と手が絡み、正に生地獄の模様である。少し距離が遠くに落ちており兵たちが走ると、監視兵の怒鳴る声とマンドリンが向けられる。必死の食への欲望である。涙が出そうな情景である。そこに生と死がある。

「おい、あの兵隊はどうした？」と聞くと、必ず返事は「死にました」と元気のない声が返ってくる。この兵もいつか自分の番の来ることを予想しているのかもしれない。

部下の死の報に、收容されている部屋を訪れ驚愕、

一步後退した。部屋で見たのは丸裸にされた遺体である。死亡者の被服は洗濯後補修、不足している衣服の補充に充てるため裸にする、と遺体收容係の言であるが零度以下のこの部屋である。遺体は既に白ろうのようになりつつある。初めての遺体対面。内地での告別式等を思い浮かべる時、この死の報告、この死体の処理をどのような形で言い伝えるか、遺族がどのような反応を示すか？ 涙なくして語れないとはこのことか？ ソ連の誹謗のみにとどめることはできない。人道上の問題である。

「この遺体は、この後どのように丁重に扱ってくれるのか？」との問いに、係は「他の遺体と一緒にソリに積んで埋葬に行きます」。材木のように裸の遺体をソリに積みロープで縛り埋葬と言うが、凍土で掘れるわけのない大地にどのように埋葬するのか？ 野犬がウロウロするということも聞いている。ソ連兵の監視下で行う行程、埋葬である。係の日本兵も無情ではないはず。このようにして飢えに敗れた兵隊の数は半年の間に何十体か、何百体に及ぶとも聞く。

「異国の丘」に永遠の眠りにつく日本の兵士たちよ、安らかに！ と涙を流すのみ。「合掌」

「帰りたい！ いつかはわからないが生きて日本へ帰りたい」これが抑留者たちの偽りのない本当の声であった。

誰が言い出したのかわからないが、「コックリさんで一度占ってみよう」との声が年配の兵からあった。コックリさんって何の神様か、仏様か、一向にわからないが、何とかの神頼みである。「是非やってくれ」と熱心な召集兵もいる。

当日、私の部屋でことが決まった。占師は年配の兵長。どこで手に入れたのか瀬戸物の茶碗と箸を持っていく。兵隊は外へ出し、下士官だけが結果を見守ることにする。占師が呪文を唱え出したが、ハタとやめ「この部屋に犬がいる、犬年の者がいる、コックリさんは狐であって、犬が大嫌いであるから出て来られない、犬年の者は部屋から出て行って下さい、早く！」と叫ぶ。私は犬年である。幸い私一人だけであり、部屋を出る。その後どんな占いをして、どんな結

果が出たのか私は知らない。犬年の者に喋ると占いが無効となり、今後の占いにも支障が出て悪い結果があるかもしれないことである。

厳寒を迎え、慣れない作業に日は過ぎる。昭和二十一年正月元旦をソ連の地で迎える。全員、作業なしの休養日を、室内で各人の土地の名産の話に一日を過ごす。

日本兵で、内地において炭鉱に働いていた経験者が当地の炭鉱に入って各切羽を見学し、炭鉱の責任者と日本兵稼働に関して話し合いをしている、との情報が流れる。そんなある日、突然、屋外への全員集合がかり、ソ連兵による私物検査が始まる。もう何も貴重品とてない、着の身着のままの兵隊、しかし、今度の目的は他にあった。

宿舎の移動である。隣の半地下宿舎に日本兵の大工経験者が入り改造していたが、そこへの移動である。

今までは十人〜二十人くらいの個室を備えた宿舎であったが、新しい宿舎は入り口から出口まで一目瞭然、だたっ広い二段の棚（寢室）があるだけ。中央に

少し広い廊下を通し、宿舍の四囲に人がやっと通れるくらいの狭い廊下、そこへ全員が移動し、寢床を割り当てられる。炭鉱作業に入ると三交代制になるための、交代を容易にするための移動である。

この頃になると、下士官も兵隊も階級を表す襟章は大半が外し、一部年老いた召集兵の下士官のみが、まだ未練気に金筋の入った襟章を付けていた。当然、名前を呼ぶのも今までは「〇〇軍曹殿」と呼んでいたのが「〇〇さん」に変わり、それが自然と、捕虜の身分に階級はない、同じ労働者で対等でないかという、今と言う平等、民主主義に入っていた。

十、炭鉱作業 開始

炭鉱の街に下車したのだから当然炭鉱作業に従事と思っていたが、屋外作業の穴掘り。それも単純な労働でのんびりと過ごさしてもらったが、環境にも慣れ、少ない食事にも我慢することを覚え、ソ連側も捕虜の取扱い方法がようやくわかってきたのと、両方ですべての疑問点が合致したのか、いよいよ炭鉱作業に入る

ことになる。作業員はもちろん一、二級の健康体を持つ下士官以下である。

将校は引率のみで作業に従事せず、兵の作業時間は更衣室で待機している。そして一人の衛生下士官がその将校に付随して、日本兵作業員の負傷、疾病に当たる。それに通訳が一人つく。

私たち憲兵下士官、兵もバラバラの宿舍に配置され、顔を合わすことも少なくなったが、身分を隠匿するには好都合であった。

まず、坑内作業に従事する者に、坑内で着用する作業衣（テント地のようなゴワゴワした着古しである）、帽子（防寒帽のようなもので、前にヘッドランプを付けるようになっていて）、靴（ゴム製のズック靴の大きいもの）、靴下の代わりに巻き付ける古い布等の支給がある。皆と顔を見合わせ聞き合わせ、軍服の上に作業時着用することにする。

炭鉱作業は年じゅう休みなしの一日二十四時間稼働である。坑内でどんな作業が待っているか一切不明であり、周囲に炭鉱作業に従事した者もない。「日本

兵は補助的作業をするのであり、ソ連側の坑内夫の指揮を受け、その作業を忠実に実施すれば良い、食事も改善されるであろう」との将校の話である。話は簡単であるが、まず不安が先に立つ。食事の改善という餌に張り切る者もいる。そんな者は若い。召集兵は机の上の仕事しか知らない。老兵たちは一カ所に集まり、不安気にヒソヒソと話をしている。

いよいよ坑内作業の第一日が来る。将校に引率された下士官以下約三百人の作業隊、収容所の正門に五列縦隊で並ぶ。皆、作業服をくるみ、紐で結んで肩にかけている。人員の点検は相変わらず遅い。寒さ、冷たさがプラスする。ドンドンと足踏みをする。監視兵が「静かに」と怒鳴る。構ってはいられない。やっと前進。いつもの道とは違う建物に向かって歩く。炭鉱特有の高い建物が見え始める。

別戸建の大きい建物の二階へ案内される。風呂の脱衣場である。広い。ここで作業衣に着換え靴をはく。炭鉱員が来て監視兵と話し合い、通訳があらかじめ編成された「長」の名前を呼ぶ。炭鉱員がその班を連れ

て出てゆく。作業開始である。どの班がどこでどんな仕事をしているか一切不明であり、後で兵同士の話し合いでその作業内容を知る。

「○○班」と呼ばれ、八人の兵と一緒に部屋を出る。受付のような所に連れて行かれ、そこで一人一人、キャップランプをもらう。部屋が明るいのか、キャップランプの光はボーッとして暗い。坑内夫のはイキイキと明るい。「ニィハラシヨ（悪い）」と文句を言うが、聞く相手でない。一旦外へ出て、坑内へ入るにはトロッコに乗り、勇ましく入坑してゆく姿を映画で見たことを思い出すが、そんな場所ではない。「ダワイ」の声で見ると、縦穴が大きく掘られ、木製の梯子が見える。東洋人的な顔をした引率の坑内夫がまず降り、それに従う。二〇段も降りた所に踊り場のような場所があり、またそこから二〇段も降りる。そんな梯子段を四回も降りると広い横坑に出る。螢火のようなキャップランプもこの地下に来ると明るく見える。よく見て、よく考えて坑道を歩かないと帰りに

迷ってしまふんじゃないか？　と思うほど、坑道は縦横に人が立って二人並んで歩けるほどに張り巡らされている。炭鉱を知っている兵がいた。彼曰く「こんな炭鉱であれば、日本の機械化をもってすれば露天掘りにして業績を上げる」と。なるほど、日本の科学陣であれば露天掘りにして、落盤等の体の危険率を少なくするであろう、採炭量も最高であろうと思う。

第三坑の発掘現場に行く。責任者が「兵隊はトロッコの運送」と手振りで指示をする。ベルトコンベアーに乗った真っ黒な石炭がドンドン流れ、トロッコに積まれてゆく。山盛りになると押し出し、次のトロッコがその場所に入る。積載されたトロッコを押すのが与えられた仕事である。鉄製のトロッコをここへ来るまで何度も見ているが、空でも重そうである。それに石炭を満載するとなお重い。一人でそれを押せと言う。困ったなーと見ているわけにはゆかない。押そうと手を掛けると「お前はトロッコを押さなくても良い、ここでチョークでトロッコに番号を入れてゆけ、今の番号の順に書けば良い」とチョークを渡される。なるほ

ど、今何台目のトロッコか、横に大きな数字が書かれている。満載されたトロッコを押し出し、空のトロッコをベルトコンベアーの下に持ってゆき、次の番号を記入する。割合と楽な仕事を任される。トロッコを押している兵隊が心配である。比較的元気な者ばかりであるが、二人ほど年配の召集兵がいる。しかも力仕事をしたことのない者のようである。トロッコの線路は中央まで約一〇〇メートル、帰りは空のトロッコを押してくる。

休みもないのかとっているとベルトコンベアーがとまる。石炭が全部積み出され、次のハッパを掛けるまでの休憩である。線路にヘタヘタと座ってしまう兵隊たち。今は完全に二食となってしまった給食関係。小さい黒パンに実の入っていない岩塩汁。そこへ今度の炭鉱作業である。「頑張り」と言うのも愚かか。

二日目より、若い私がトロッコを押し、老兵と仕事を代わる。なるほど、石炭満載のトロッコは重たい。しかし、二、三回往復すると押すコツがわかってくる。線路に上りと下りの勾配があり。それを上手に利

用すると楽である。下り前で思い切り押し、両手でトロッコの上部を掴み足を下部の縁に乗せる。トロッコに乗るのである。トロッコは勢いよく走り、その情速で上りも下りも力が不要である。

要領がわかればトロッコ押しも苦にならないが、石炭満載のトロッコが脱線でもしよものなら大変である。栄養不良の者では無理な仕事である。反対線路を通る友を待って二人で頑張るが、トロッコは重く容易に持ち上がらない。ソ連の女性労働者が通りかかる。

「ヤポンスキー、サルダート、セイノ、セイノ」と叫ぶ。「日本の兵隊よ、セイノ、セイノの掛け声ばかりではニイハラショー(だめだ)」と言うと、トロッコの前に歯止めをして、後方を尻でグイとトロッコを持ち上げて脱線直す。その尻の偉大さに脅威とコツを学ぶ。毎日毎日が暗闇の中のトロッコ押し。

働け働けの日々が過ぎてゆく。ノルマの出来を聞くが、達成しているのか、一〇〇%以下なのか、一切不明。ソ連の切羽長が「作業終了、上がれ」と言えばノルマ一〇〇%達成と思っている。そうすると毎日がノ

ルマ達成である。だから切羽によって作業終了の時間が違ってくる。早い切羽の班は定刻に終了し、入浴を済ませている。

入浴と言っても、日本風の湯舟があるわけではない。水道の蛇口が並んでおり、お湯と水が出る。それを桶に受け、まず真つ黒で目玉のみがギョロギョロした顔を洗う。次いでタオルに石鹸を塗り、体を洗う。その作業を早く済ませないといつ湯が止まるかもわからない。水では汚れが落ちない。石鹸は茶色の素質の悪い固形が支給されたが、貴重品である。

板の囲いの向う側は女性用であり、ソ連の女性の話し声が聞こえ、監視兵が時々浴場に入ってきて来ては節穴から覗いてニヤニヤしているが、日本兵はよう覗かない。プライドがあるからか、女性は平気のようである。穴を埋めることもない。

坑内作業に慣れてくるころに、作業内容が変更されることがある。有蓋貨車への石炭の積み込み作業である。無蓋車へは機械での積み込みが可能である。有蓋車は一部、ベルトコンベアーで石炭を流し積みしている

が、捕虜を遊ばさず使えとばかり、野積みの石炭を有蓋車にスコップで積み込ませる、そのスコップの大きいこと。先が平で四角のスコップである。そして良質の石炭は軽い。下地がコンクリートのような物であれば、スコップはすいと入る。その石炭を、開けた入り口より両角の方に放り投げる。四、五人で作業時間内で十分にノルマが上がる。ただし、冬季間の外での貨車積みは寒さとも戦わねばならない。

冬季になれば外は零下四〇度ともなる。零下四〇度以上になると、本部に黒い旗が掲揚される。野外作業中止である。

しかし、炭坑に入れば気温はいつも二〇度前後の適温であり、快適である。坑内は寒さ知らずである。凍傷はない。宿舎の暖房も快適である。作業が終わり帰路につく時、必ず誰かが作業衣の中に石炭を忍ばせて持って帰る。良質のカロリーの高い石炭は軽く、負担にならない。宿舎の四隅にあるベチカは勢い良く燃えて、シベリアの寒さを忘れさせてくれる。

炭鉱とは地中での作業である。陽の当たる場所では

ない。それに三交代制が実施されている。一番方は、作業開始の午前八時に備え収容所を薄暗いうちに出てゆく。作業終了は午後四時。それが通常であり、遅い切羽は一時も労働が延長されると、全員揃って帰途につく時は真つ暗闇である。太陽の顔を見ることはない。

二番方は太陽の光を浴びて炭鉱へ行くが、帰途は真夜中である。

三番方は夜半に出てゆくが、作業を終わり風呂で炭塵を流しサッパリとして、太陽の明るい、温かいお顔を拝見して帰るが、さてそれから休養のための睡眠をとろうとするが眠れない。また、一番方が帰ってくるどガタガタと騒がしく、熟睡が妨げられる。

昼は働き夜は睡眠という人生の法則に反逆しているのだから、致し方がない。

白夜、雪で真っ白の道を帰る二番方。疲れて元気がない兵たちの歩行。それを励ますように歌う監視兵の二部合唱。下手か、上手か、私にはわからないが、いろいろな慰問団で来た歌手よりも迫力のある二部合

唱。もちろん歌詞の内容は不明であるが、哀調を帯びた歌声、民謡にも似たりズム。彼らは二人寄ると必ず二部合唱となる。広い白い広野、人気がない雪原、そこに流れる男らしい歌声。その哀愁を帯びた声に、遠い祖国の故郷の山々、川、肉親の顔を思い浮かべたのは私一人ではないだろう。

十一、炭鉱内の異邦人

炭鉱には各職種の持ち場があり、技術者もたくさんいる。また、ソ連邦と言うだけあって、人種も様々である。真のソ連人は、噂によると、この炭鉱では数人しかいないということである。

所長と覚しき紳士は黒のダブルのスーツに身を包み、白色人種特有の鷲鼻を持ち、時々事務所内を闊歩していたが、この人が通ると従業員は脇に寄り、広い通り道を開けていた。共産党員ということである。

坑内での他国人との交わりも慣れてくるにつれ、日常会話も少しずつ覚えていく。挨拶から食い物の話、作業の一部での話等、何らかの機会に雑談を交わすよ

うになる。初めのうちは他人種の労働者からの軽蔑的な言動もあったが、相互扶助のような簡単なことで解決できるようになった。

タタール人、蒙古系の人が多い。欧州戦線でソ連の捕虜になり、強制労働としてシベリアに送られて来たと言うドイツ人、ポーランド人等も混じっている。彼らも、刑期は満了したが祖国に帰っても、敗れたドイツは経済的、精神的に受け入れてくれないと覚悟を決めた人たちのようである。ゲルマン民族の誇りを固持し、ドイツ化学の素晴らしさを身振り手振りで語ってくれた。

しかし、炭鉱の引込線に入ってくる機関車、あるいは貨物を積んで構内に入ってくるトラック等を見ると、「アメリカはハラショー！（良い）」と口を揃えて誉める。彼らに言わせると、ソ連に敗けた日本は一番馬鹿だ！と。

炭坑内で働く女性は、日本の兵隊より体格が大きく立派である。また良く働く。力持ちである。なぜか、黄色人種より白色人種の方が多かった。彼女らは、坑

内で働く時は黒い労働服をまとい、ズボンをはき、頭に色模様の三角布を被り、白い顔を炭塵で黒に汚し労働力を誇示しているが、浴場より出て事務所を歩く姿は別人である。花柄のブラウス、スカートをヒラヒラさせ、口紅を引き、若さを強調し、手に白バンの大きなのを抱えている。飢えが先行し女に興味のない兵隊は、彼女らに「ヤー、ヤボンスキー・サルダート（おい、日本の兵隊）」と声をかけられ、あつ、発破係の女だー、と後で気づくほどである。

彼女たちは、化粧品の代用としてオシロイの代わりに塗る物がないか、口紅はないかと兵隊に聞いていたが、悪賢い奴が、オシロイの代わりに歯磨き粉を渡したところ、大きい黒パンをくれ大はしゃぎ。兵隊間で歯磨き粉の探し合いが始まり貴重品となる。時を移さず「朱肉がないか」と叫ばれる。口紅の代用である。なるほどと感心する。朱肉を塗ればクッキリと美女になる。「口づけされた恋人の顔が見たいもの」と皆が喜び笑う。しかし彼女たちは真剣であり、黒パンの量はオシロイより多い。朱肉を持っている兵たちは本部

要員、経理係の者に多い。

彼女らにもてる者に通訳がいる。収容所に入所してから日本軍の通訳として私の同期生の神力伍長がソソ間を走り回っていた。彼は憲兵教習隊のロシア語班の出身であり、私と同じ海拉爾憲兵隊へ赴任した親友である。「サーシカ」と監視兵仲間と呼ばれ、どこへ行くにも人気者で、炭鉱の彼女たちは「サーシカ、日本の捕虜はこのような物を持っていないか？」と欲しい物を彼に告げ、物々交換を申し出て手に入れる。監視兵も時には彼に無理を言っていたようである。

ある時、彼は「炭鉱事務所より、日本人捕虜で坑内に入っているハラシヨラポータ（良く働く者）を推薦しなさい、報奨金を出し、他の捕虜の労働意欲を上げたいと思う旨の申し出を受けたが、誰彼と思ひ浮かばず、一存でお前を推薦しといた」との言。私はびっくり。後日、何十ルーブルかの金を炭鉱責任者よりもらい、大きい白パンとジュースももらい、何人かで食べたことを思い出す。長いシベリア抑留中、腹いっぱい食べ、飲んだのは、この時が初めて最後である。

しかし、それは、肉体的な満腹感であって、一緒に食べ、飲んだ友人たちも「やはり黒パンのあのスッパイのが一番美味しいな」と異口同音に久しぶりに大笑いをする。

十二、休養と食事

炭鉱作業が始まる前に、収容所全員に対する大規模な身体検査、と言うより体格検査があった。坑内作業と地上作業に分かれてからは、そのような全員に対する検査はないが、人間生身の体、いっどこで体のどこかが悪く発症するということもある。まして、減ったとはいえ、千人近い大作業部隊である。医務室が設けられ、日本人軍医及び衛生兵が常駐している。しかし、彼らはソ連軍女医の管轄下に置かれ、最終的な権限はない。

炭鉱側より、明日の作業人員は〇〇人と指示されると本部はその人員を確保、送り出さなければならぬ。作業人員が不足すると、軽症の者がその補充として供給される。その人員に対しての否決権は持っていない。

ない。否応なしである。

ソ連だから、労働の国だから、適用する傷病と通用しない負傷があるのが現実である。

炭鉱で作業員が頭を何かに強打して出血。作業を中止して医務室に急行。直ちに縫合し、医務室で仮眠をとらせたが、翌日は作業要員として駆り出される。三針も縫合するという負傷である。旧軍隊であれば、抜糸までゆっくりと休養できる程度の傷である。しかし、ソ連の監督は「作業は手足、体を使ってするものであり、頭でしない、また頭の傷と作業は関係がない」「ラポータ、ピストレ、ダワイ（仕事に早く行け）」と顔を真っ赤にして怒鳴る。外傷で手足等の他の部分の負傷は以上のように、軍医、衛生兵が休養を要すると言っても、言うだけ無駄である。

私には反対の経験がある。坑内での準備方で坑木運搬作業を実施中、丸木のサクラレが左人差指に突き刺さり、木片が貫通するという傷を負った。医務室で木片を除去、一針縫合を軍医が施してくれる。「坂本さん、指だから三、四日休ましてくれますよ」と衛生兵

が慰めてくれる。鎮痛剤の注射もなしで疼痛を我慢するしか致し方がない。不運と諦める他はない。医務室へ入ってきたソ連の女医は、まだ包帯のしていない片手を見て「一週間休養」と、痛さにゆがんだ私の顔を見て日本の軍医に指示を出す。いつも憎らしい女医の顔が、その時、弁天様の顔になったのは確かである。

痛みのとれた二、三日後は、贅沢であるが退屈である。本部室に遊びに行き、作業のない将校たちと碁を打って遊ぶ。初歩的な石の運び様を、この時に初めて教わった。

休養を命ぜられているが、いわゆる公傷である。食事は坑内作業並みの黒パンが支給される。所内作業員より大分大きい。付近からの眼差しが強い。まず半分を食べ、半分を手製の布袋に入れ、頭の上の釘に吊るす。一眠りして傷の消毒に医務室へ行こうと目を開き頭の上を見ると、何も無い。あの黒パンを入れた白い手製の布袋がなくなっている。「あーやられた！」と思った時はもう遅い。私の黒パンは誰かの腹の中に収まってしまっている。「働かざる者は食うべからず」

の教訓が頭の中に蘇る。「ある時に食う」の教訓である。

内科的疾患になるとまた違った診察になる。検温の結果、三七度以上の微熱のある者は「即、一日休養」の軍医の指示がある。そこにまた悪賢い召集兵の知恵が回る。体温計をこすり摩擦熱でいかにも熱があるようにと、体温計の度数を上げる工作をする。

体の異常者の検温は午後五時より開始。異常を訴える者は廊下に並んで一斉に検温をする。監視する者がないのが幸いする。衛生兵も多忙で検温の監視まで目が届かず、旧軍隊の規則を思えば不正をする兵隊もなにと安心している。時間が来れば「検温終わり」と叫び、一人一人の検温を記入してゆく。

ある日、検温の結果、四〇度近い高熱の兵隊を発見、直ちに医務室に運び軍医が聴診器を当てるが、胸部疾患を疑うような異常もなく、呼吸、脈拍も正常、なお念入りに体を検診するが熱の出所が不明。もう一度検温をすることになり、今度は軍医の監視もあり、体温計の水銀は上がらず平熱の三六度五分。別室にて

の軍医の叱責に彼も観念、体温計の操作を白状する。この不始末、ソ連の女軍医に報告することはできず、さりとて放置することも軍医としての威厳に関わり、この処置がどのような結果になったのか、あずかり知らないが、その後、検温は医務室の中で衛生兵の監視下に行われ、真に熱のある者だけが休養を与えられるという結果になる。

休養者の食事は至って少量。黒パン一日三〇〇グラム、飯盒の底にチャブチャブという岩塩汁のみである。「働かざる者、食うべからず」の法則通りである。炭鉱作業が始まって、宿舍の改造があり、また入ソ当初あった階級制度も、いつごろから襟の階級章を外す者が多くなり、捕虜の身分で同一であり、下士官と威張ってもいられず、ただ坑内作業場では班長としての責任を負わされる。何か変な体制が出来上がる。そのため食事も世話をすることも、されることもなく、自分のことは自分でするというような昔の躰が生まれる。

給食の流れが一変する。炭鉱作業が始まり重労働に

従事するようになる。給食の内容も徐々に変化し始め、坑内作業員と地上作業員の差が目に見えて差別がわかるようになる。ノルマによる給食が開始される。

ノルマの報告は、作業本部で把握している一人一人のノルマでなく、炭鉱内切羽、切羽の作業状況である。その切羽の報告により食事の状態が変化する。

炭鉱作業が終わり宿舎に帰ってくると、疲れた体を横にすることもなく本部に行き、食券をもらう。その食券は皆同一ではない。ノルマ、あるいは坑内、地上と、作業によって区別されており、各人はその食券を持って炊事場に行く。炊事場は日本人捕虜によって作業が行われ、体の比較的弱い者が従事している。炭鉱作業と同じ三交代である。

炊事場には受付のような小窓が設けられて、その窓口に食事区分の表示があり、各人が該当する食券をその窓口に差し出すと食事が配給されるという組織ができる。

食券は大体四つに分けられていたようである。

- (1) 優秀な坑内夫
- (2) 炭鉱内従事者

(3) 収容所内作業員 (4) 休養者

ここで飯盒が貴重品として登場する。給食は黒パンと汁物である。旧軍隊の飯盒には中蓋が付いている。黒パンを中蓋でもらい、スープは飯盒に入れてもらう。飯盒がないと給食をもらえなくなる。誰かのを借りる方法もあるが、窮すれば通ず。炊事場で使用後捨てた缶詰の空き缶の利用である。なるべく大きい空き缶の両端に釘で穴をあけ、紐を通し飯盒の代用品として使用する。召集の老年兵の考案した工作品である。その貴重品である飯盒が、またよく盗難に遭う。そのため、各人が工夫して飯盒の横腹に釘等を使って大きな字で姓名を書く。何かの模様を書く。器用な者は自分の家紋を彫っている。またこの大きな字、模様が大きいに役立つ。給食作業員が自分の旧班員で知人であれば、その飯盒の印によって自分を誇示して給食員に自己宣伝をする。給食員も捕虜の飢えを知り尽くしており、心情は良くわかる。グッと釜を混ぜて、具を多く入れてくれる。また、一杯のところを杓子二杯も入れてくれる。「相身互い」である。

入ソ当時、岩塩の水ばかりのスープも徐々に野菜が入り、炭鉱作業が始まると何の骨かわからぬが骨片が入るようになり、スープの上に油が浮き、少し美味く栄養があるような錯覚に陥る。そのスープも、骨から肉が入るようになる。ただし量が少なく、坑内作業員はいつも空腹に重労働と厳しい毎日を送っていた。このころは最早物々交換する品物もなく、本当の着たきり雀、故郷の父母、妻子に見せられぬような炭鉱作業員の姿をしていた。

作業服は、生地がテントのように頑丈な生地できており、破損ということはまあない。下着は入ソ当時支給された物で、まだ間に合っている。が、何かの都合でなくした者は、本部へ申請すれば中古品が支給された。この中古品は死亡した者が身に着けていた衣類である。死亡者は全員、被服を脱がして丸裸として埋葬された。その衣料を洗濯整理したのが再支給される被服であり、時には死亡者の氏名が記入された物もあった。

坑内は本当に冬は暖かく、夏は涼しく、真っ暗でな

ければ、空気が良ければ、労働がきつくなければ、過ごすのに最適な場所であるが、最大の闘いは「飢え」である。次いで睡眠。我々現役兵の健康体でも、この飢えと睡眠に負けそうな状態になる。ましてや召集の老兵が次々と倒れてゆく姿を見る時、ソ連の鬼畜のような捕虜の扱いに、来世こそと復讐の念を燃やしたのは私一人ではないだろう。

十三、日本新聞

春が来て夏が過ぎようとするころからか、本部よりの通信で『日本新聞』が発刊され、少しは内地の様子もうかがい知れるから作業の合間を見て読むように廊下に貼り出した。一カ月ごとに新しい新聞が来る予定。労働も肝要であるが精神的な教養も必要と『日本新聞』が発刊され、作業本部前の廊下に貼り出されることになる。入ソ以来、印刷物と言えは初めてのことである。活字が懐かしく、一度思い切って本部前の廊下に立つ。勇気の要ることである。今のところソ連側からは作業に対する何の苦情もない。各切羽の上がり

の早い、遅いがあるが、皆、ノルマを達成しての上がりである。

「働くこと、食べること、眠ること」この三要素以外のことは考える時間もなく、また必要もない。この三つが回転して一日一日と月日が過ぎてゆく。また坑内作業で何らかの些細なトラブルがあることもあるが、何もそのことに対するソ連側の要求、または罰則に抵触したというようなことも聞いたことなく、ただただ全員一致して作業に従事することが与えられた使命、運命と割り切ったの毎日。

『日本新聞』の掲載する記事は、内地情報として、物資の不足、インフレ、浮浪者等が隅の方に記載されているのみで、政界における共産党の勝利宣言、戦前における軍部の横暴、関東軍上層部の腐敗等の記事が多く、今、共産党なくして国家の再建はない、と結論を出している。

この新聞を熱心に読む者は、共産主義を少しでも理解し、その主義に賛同し、ゆくゆくは共産党に入党するのではないかと憶測する者も陰であらわれる。

幸いに現在、捕虜に対する一切の教育あるいは講義等は行われていない。また日本人同士、お互いの思想に対する議論等する暇もない。

一番大切なことは食うことである。食うためには働かなければならない。それが帰国へと繋がる最短の道であると多数の兵士は信じ、ただ黙々と働いている。

ソ連側も、そんな無駄な教育をする時間があれば働かせた方が得だとの考えではないだろうか。坑内で働くソ連の労働者にしても義務教育も受けてなく、僅かの常識と基本的な人生の歩み方を身に付けたという者が多く、他はシベリアへ流刑された囚人の満期者、欧州戦線で捕虜となったドイツ人等の労働者であり、彼らもそんな主義主張よりパンの方が大事である。

収容所内での共産主義教育は一度も行われず、また、この本を読みなさい、この新聞記事に対する批評を言いなさい、というようなことは一切なく、そんな時間のないことも幸いだった。

その後、『日本新聞』の記事がどのように変化し、内容も教育論に終始したのかあずかり知らない。

作業中、隊内にも民主化の流れは、自然的、必然的に行われ、階級章はほとんど着けている者はなく、下士官、兵の区別もなく、他の人を呼ぶのも「○○さん」と気兼ねなく、心やすく呼ぶ風習が一般に広がる。

このころ、頭髪を伸ばす者も多く、坑内作業員は落盤に備え頭髪を伸ばした方がより安全であるとの屁理屈を付け、伸ばしていた。私も例外でなく、オールバックにしていた。理髪の方は、手の器用な者が紙を切る鋏を使って上手に刈り上げてくれた。収容所内にはまだ理容所は開設されてなく、地方人として理髪店で働いていた者は本部で氏名を把握し、所内作業員として稼働させ、監視兵等ソ連側の要請があれば理容に従事させる程度であった。

大袈裟に言えば、こんなことが民主化への第一歩であったのかもしれない。

十四、日本兵のみの炭鉱切羽

入ッして第一回目の雑煮も赤飯もない正月を過ご

し、やがて第二回目の正月もあと少しで来るころ、相変わらず収容所の出入りは監視兵と収容所員との数合わせに時間がかかり、寒い冬季の折は足の冷たさを防ぐ足踏みの音が故郷へ届けとばかり、高々と響き渡る。

「おい、今度、日本兵ばかりの採炭の切羽ができるらしいぞー」との噂が流れる。噂なんて何遍も聞きあき、実現したことはない。「ダメイ！ダメイ！」と信じる奴は馬鹿だ」が定評である。そんな噂話をする暇があれば、横になっている方がよっぽど楽である。

「日本兵の採炭切羽の長は村中さんに決まったそうだ、いよいよ編成を始めるようだ」話が具体性を帯びてくる。村中さんは炭鉱事務所の幹部の信頼が厚く、温厚な人柄で責任感が強く、今までの作業状況からも適材適所としての任命であったと思う。約三十人の日本兵ばかりの切羽の名前が発表されたのは、それから間もない時である。幸い私の名前も入っている。私はまだそれまで採炭準備方の責任者として入坑していたが、採炭作業が遅れると準備方の仕事もその時間分遅れる

ということ、いつも上がりが遅く、私たちが上がって来ると先にながった組が入浴を済ませ、着換えを終わりに、作業服をくるんだのを枕に、浴場の休憩室のここかしこに横になっての睡眠。引率の将校、衛生兵も一刻も早く収容所に帰りたく、「御苦労さん」の一言もなく、「早く顔を洗ってこい」「入浴を早く済ませ」等々せかす。その頃の浴場の湯はとろとろしか出ず、洗面をするのが精いっぱい。やっと溜まったお湯で瘦せ細った体を洗うのが限度。着換えの最中に「整列」の号令がかかる。その現状を知っている村中さんが、私を指名して下さったものと察知する。ありがたい。

作業開始。顔を揃えたのは、斉々哈爾での松花江沿岸で悲運の涙を流した者が大半である。皆気心を知り尽くし、作業がしやすい。また現役兵ばかりであり、召集の老兵はいない。

作業は採炭のみである。奥行約五〇メートルほどのベルトコンベアーが準備方により移動し、発破をかけられた。黒い輝きのある炭層が崩れ、大小様々な塊となって天井まで、僅かな隙を作っている。その狭い間

隙を縫って一人一人と奥へ進む。「作業開始」の号令と共にベルトコンベアーが動き出し、石炭がその上を走り出す。粉碎された石炭をコンベアーの上に乗せる作業である。各人、大きなスコップを持って使うが使えない。石炭の大小の塊にスコップの先が入らない。自分の位置を確認して、まず足許の大きい石炭塊をコンベアーに流してゆく。足許の地表が出ると、スコップが音を立てて滑って石炭が上に乗る。

そこまでは余力が要らないが、持ち上げるのが大変。内地の土を掘るスコップと違い、真四角な先の広いスコップである。それ自体も重い。その上に、軽いといえども石炭である。重労働である。しかし日本兵ばかりの作業、しかも昔一緒に勤務した者同士である。助け合いがまず始まる、話を通じる、相談ができる。作業が捗る。発破をかけられ粉碎された石炭を、周囲が美しいまでにコンベアーに積み込めばノルマ完了である。美しく輝く黒光りの炭層、二メートルの高さはあるが、無限にあるような錯覚も起きる。

奇麗になった周囲を眺め、内地へ帰還して職がな

かったら、九州か北海道の炭鉱にでも働かか、と瞑想する。日本兵ばかりという心の安らぎの故か？

日本兵の切羽はいつも一〇〇%以上のノルマを上げ、日本兵としての誇りと意地を見せる。これも切羽長、村中さんの部下に対する恩情と、部下の村中さんに対する信頼感の表れであるが、ソ連側から見れば、炭鉱側の作戦の成功である。日本兵の気質を知り、団結心を読み取り、それを利用しての成果である。

日本兵ばかりの稼働ということで精神的な余裕が生まれ、作業内容も採炭ばかりで慣れてくる。食事もある。食にまず腹が納得する。スープがまた一段と美味しくなる。具が多くなる。野菜はもちろんのこと、肉片が入り始める。大きい骨片に肉が巻き付いている。その食べる顔、姿はさながら鬼のようである。口をゆがめ、顔をしかめ、骨の端を手持って食い千切る。近親者には見せられぬ顔である。

入ソ二度目の正月も、一日休むだけで坑内で過ごす。暦のない毎日が暮れてゆく。日本人の切羽は相変わらず三交代を実施しながらノルマを上げ、成績を上

げてゆく。噂が噂をまた呼ぶ。「間もなく炭鉱作業を終了する」「日本兵は炭鉱作業より撤退する」そのための補充について、炭鉱側と収容所側の幹部の会議が連日行われている。

厳寒も坑内の暖かさで苦痛知らずに過ごし、凍傷患者は皆無。事故による死者もなく、骨折、負傷者等は出たが、移送されたのは僅か数人。このことを思えば、入ソ時わずか半年くらいの際冬の中、飢えと栄養失調で亡くなっていった兵の悲痛な出来事が嘘のような悪夢に思える。労働に慣れ、給食関係の改善が考えられる雪解けの日が来て、日本兵の炭鉱作業終了の報が本部より発表される。噂が真実となる。「ダモイ(掃圀)が近い」との声が多い。

シベリアの冬より春への転換は早い。地下に炭層を埋蔵しているせい、草の芽を出すのも早い。白い広野は青に変色する。

十五、野外作業

雪のシベリアの白が春とともに青色に移り変わった

て、名も知れぬ可憐な小さい花が咲き始める。捕虜にも春の陽気が移り、何かウキウキした心が弾む。炭鉱作業での太陽の恵みに欠けた地下作業と違い、甘い、奇麗な、おいしい空気を胸いっぱい吸うことのできる幸せを噛み締めての毎日の野外作業。それに噂にしろ、ダモイが近いと真実味を帯びる。相も変わらず収容所の出入りには時間がかかるが、午前八時の出発、午後五時の掃所。一日じゅう太陽を拜んでの作業である。労働も炭鉱作業に比べれば楽であり、監督も指揮も日本兵同士である。気心が知れている。

収容所より約二キロほど離れた広野の中、そこが作業場である。太い原木を枕木の代用として、その上にレール二本が打ちつけられ、長い長い線路ができている。野原の上に置かれ、基礎なんてない。そのレールの上に貨車が滑り込んで来る。長い無蓋貨車、その上に機械類が積み込まれている、その機械の積み下ろしである。

誰に憚ることなく「セイノー、セイノー」の勢いの良い掛け声が聞こえてくる。この機械類は満州か？

ドイツか？ どちらからか解体して送られてきた石炭液化の化学工場の部品で、ここに将来大きな石炭液化工場が建設されるということである。もちろん機械は野積みであり、建物はまだない。長く連結した貨車の荷下ろしが完了すると、貨車が後退して出て行く。その後のレールを移動するのも作業の内である。長いレールを、一列に並んだ日本兵が木の棒や鉄棒をテコ代わりにして、枕木ごと線路を約一〇メートルも移動させる。レールの移動が終われば貨車を繋引した機関車がゆっくりと入ってくる。枕木とレールがグーと下がるがお構いなし。脱線もしない。また機械の積み下ろしである。起重機のような文明の機械はない、全部手作業である。重い機械は貨車の縁から材木を斜めに二、三本地面につっかい、その上を滑り落とす幼稚な原始的方法を、ソ連の監督が教えてくれる。よほど注意しなければ、骨折くらいの負傷で済まされぬ大怪我の元になる。今までの健康体が無駄になる。作業のノルマについては監視兵は何も言わない。作業監督も時々見回りに来るくらいである。貨車の出入りで作業

の進捗がわかるというものである。

地上作業になって必然的に黒パンの量が少なくなる。しかし、この頃のスープの味が良くなり、具も大量に入っている。

広い草原に青い野草が背伸びを始める。農村出身の兵がアカザという野生の草を発見、これが食用になると言う。熱湯で茹でるとホーレンソウの味がすると、飢えの兵にとって大きな朗報をもたらず。幸いに皆、飯盒を持参している。春とはいえ冷えがきつく、ここかしこで焚き火がされ、監視兵も黙認し、暇の折は暖をとっている。作業員一人が炊事に回り、アカザを採り茹で始める。軟らかく美味い。本当にホーレンソウのおひたし同様である。野生だから一面に生えている。当分はこれで少しでも満腹の感が味わえる、と皆が喜ぶ。

が、翌日、青天井の便所で用を足した兵が妙な顔で帰ってくる。大便が真っ青ということである。犯人はアカザである。腹の足しにと大量に食べたお陰で、消化はしたが色素が残り、腸を経由して排出されたの

だ。しかし大便が青色というだけで、体、特に腹部に異常がない。また、量もほどほどにすれば栄養価があるのではないかと衆議一決、毎昼食時に常食することにする。また収容所内の作業員にもと、採ったアカザを持って帰り、分け合う。どのくらい栄養価があるか不明であるが、緑野菜の少ない寒冷地であって、正に地獄での仏と同じである。ありがたい栄養素である。何か知らないが力のつく感じがする。

このころの話題はもっぱらダモイばかりである。また食い物の話も出だし、名物名産が出る。

地上作業に移っても民主化、共産化等の教育時間、否、話一つない。『日本新聞』に関する話題もない、労働第一主義である。

十六、ダモイ―ナホトカ港

四囲の山々の雪も解け、シベリアの春も太陽光の暖かさと同じく人の心も温かく、何かホッとする毎日の地上作業が続く。ノルマも余り強く叫ばれず、日本兵同士ばかりの和やかな雰囲気にも人の気も和む。しかし

ダモイの噂は噂のみに終わるのか？ これという動きは一向になく、隣の作業大隊の炭鋸作業は集結する気配もない。

そんなある一日、「作業休止」の命令とともに、一人一人の面接がある旨、本部より通達される。ソ連の本部は何を考え何を行うか、誠に五里霧中のようなもので、日本兵にとって想像もできないことで、今回もまた何のための面接か、果たしてダモイか？ また壮健な者は奥地への労働転送か？ 流言が収容所内を駆け巡る。悲喜こもごもの時間が流れる。

広い宿舎の一角で、収容所高官と通訳による面接が始まる。机を挟んでの対面である。あらかじめ提出している身上調査の再調査のようなものである。

氏名、生年月日、入営場所・年月日、日本における肉親者の住所、氏名等。いよいよダモイが現実となってきた感がある。しかも濃厚である。難しい質問はない。何のための面接か、また疑問が湧き出す。四、五日すると約五十人くらいの指名された者の健康診断がある。病気の者、虚弱者等ばかりである。早くから内

命があつたのか、その者たちはない荷物をまとめ、列をつくつて収容所を出て行く。果たしてダモイか、別の保養所的な収容所への転進か。しかし、収容所全体が何か動き出した気配が感じられる。作業も軽作業か所内作業ばかりである。

またまた、身体検査実施の命令が出る。まず日本の衛生兵が外見の検査をする。健康状態全般に対する外見上の所見である。なぜか頭髪は短く五分刈りにするよう指示され、次にワキ毛を簡単に剃られる。何のことはない、陰毛も剃られる。何のためにか目的は不明である。ダモイさえ現実になれば、五体満足である限り、毛の一本二本は文句は言わない。ソ連の検査官である女医も眉一つ変えずジツと見つめている。天晴れである。何か帰国への第一関門を通過したような感じで、お互いに顔を見合わせ、宿舎で意見の交換をする。帰国一辺倒に意見が合致する。

我々の収容所の捕虜に対する労働、待遇等は、入ソ時期も早く、炭鉱作業という超重労働であり、そのノルマを完全に遂行したという「ハラシヨラボー

ター！」の実績もあり、食事関係と一部労働関係を除けば、収容所長も大いに誇りにするほどの成績を挙げている反面、思想教育、民主化教育等の精神教育は行間に時間がなく、一時間の教育時間もなかったのは収容所幹部にとってマイナスか、プラスか？ かつまた、我ら捕虜にとつても何とも言えない年月の経過とも言える。

身体検査の翌日、またしても所持品の私物検査がある。着たきり雀の身、大切なのは飯盒のみである、失う物は何もない。整列した兵の前に並べられた物品は飯盒の他、過酷な作業の合間に作成した箸、それを入れる箸箱、見事な細工をした者もある。それ等雑品を雑糞に。入ソ時より大事に使用した毛布。その毛布も靴下になつたり着たきりの軍服の縫ぎ布になつたりで、最初の半分くらいの大きさに切り刻まれている。貴重品なんて一点もない。そんなガラクタをソ連検査官は慎重に検分していく。「時間の無駄だ」と言いたい。

身体検査も済んだ、私物検査も終わった、後は汽車

に乗るだけと思っっているが、いつまた別の命令が出るか不明。誠にソ連という国は不可解な国であり、軍である。

「忘れもしない昭和二十二年四月五日、「私物全部持って整列」の号令が来る。いよいよ帰国か？ 移動である。どこへ行くとも收容所員は言わない。ただ駅に行き乗車のみ命令受領のようである。

二年前に下車した時と違い服装はまちまち、戦闘帽（軍帽）を頭に乗せている者、ソ連の防寒帽を被っている者、汚いながら軍服の上下を着ている兵、上衣は軍服でズボンに炭鉱用の作業ズボンという兵、靴も思い思いである。その列を挟んで炭鉱街の人々が見送ってくれる。「ダモイ・トウキョウ」の聲が盛んに言われている。住人の勘は鋭い。この一声でいよいよ帰れるという信念が生まれる。辛い厳しい一日一日の作業であったが、振り返ってみると、また楽しい一面もあった炭鉱の街・チャイナゴールスカヤ街よ、さようならである。

昭和二十年九月二十七日、この駅で下車。威風堂々

とまではゆかないが、軍服に身を固めた一個大隊（千五百人）が軍規の下、上官の命令を守り、この收容所に入所した当時が思い浮かぶ。

以後、待っていたのは飢えとの闘いだった。白い飯の幻想に悩まされ、空腹に夜の安眠を妨げられ、道路に捨てられている野菜の屑を拾おうとして危うく生命を落としかけた兵たち。来るのが早い敵寒の敵。関東軍最後の召集で徴兵された老兵たち。体力、気力のない、平和な家庭に育まれた苦勞知らずの兵に待っていたのは寒さと飢えと、それに加算された重労働。空き部屋を利用した霊安室には凍った裸の死体が木材を並べるように積み重ねられ、目を覆うものがあつた。

飢えと同時に起こる欲望は次の物であるタバコだ。終戦時持っていたタバコは吸い尽くすか、列車での輸送途中、監視兵に巻き上げられたか、パンに変化したかで、皆無である。どこで習ってきたのか、紙の切れ端で鋸屑おがくずを巻き、タバコの形にして吸い始める。「窮すれば通ず」の諺どおりである。その紙も日本の辞典の紙が最上と通人は言う。気休めである。隠し持って

いた貴重品をタバコの粉と交換する兵もいる。タバコを吸わない私たちは冷静で、慣れて器用に巻くタバコの好きな兵たちの手つきを見守るだけである。

酒類、関東軍健在時は物資は豊富にあった。甘味品、アルコール品等、不自由はなかった。内地では砂糖、酒等の配給制度が実施されていたらしいが、関東軍にあつてはまだ豊富にあり、街のどこでも飲ましてくれた。飲食店、料理屋でも日本酒はあり、それより強い白酒（バイチュー）、ウォッカ等も飲むことはできた。しかし、捕虜生活が始まってからは口に入ることはなく、また飢えが先に立ち、飲むことがなくなつたのが本当かもしれない。酒好きの者も、復員まで一滴のアルコールも口にしなかつたのは真実である。

「性」、こんなものはほど遠い欲望であり、生きることへの願望に、話にも出たことがない。妻帯者の多い召集兵からの口から洩れたこともない、夢のまた夢である。

「望郷」、遠い異国に抑留された者全員が思うことは同じである。特に妻をめとり、子を育てた兵にとつ

ては、一刻も忘れられない苦渋の毎日であつたと推察できる。

老兵同士が部屋の片隅で作業の休憩時に集い、上官に聞かれぬようにヒソヒソ声で話す姿をよく見かけた。何の話か想像がつく。独身の下士官、兵にも肉親がある。両親、兄弟、しかし彼ら老兵にとっては、独身者にはわからない妻、子の話が一番共通する話題であつたと思う。その思いも届かず異国の土となつた数えきれぬ英霊、生き地獄とはこのことかと思つるのは私一人ではない。

一日二食主義に慣らされた体、駅前に集合整列したのは午前か、午後か、記憶にない。線路の端に乗るべく用意された貨車が私たちを待っている。胸が躍る、心が騒ぐ、あの貨車へ乗れば懐かしの日本へ帰れるのだ！と思ふ反面、奥地の炭鉱への移動ではないか、との不安も募る。ざわめきがある。

そんなざわめきを破るように、通訳のひときわ大きな声が四囲に通る。「今から名前を呼ばれた者は前に出て、自己申告をしてあちらに並ぶようにお願いします

す。では、名前を読み上げます」「○山×吉」「ハイ」列の最後尾の方から四十過ぎの瘦せた長身の兵が前に出て「○山×吉です」と自己申告をする。

通訳の隣には収容所長以下数人が並び、見慣れない二、三人の顔がある。所長は手に私たちが書いた「身上調査書」を持ち、申告者の確認を行っている。移動の故か？ 四囲の警戒兵は今日は特に厳重で、監視兵の数も多く、マンドリンを持った顔も緊張している。

「よし、向こうに行き並んでいなさい」と左列の空地を指す。係の者が手招きをする。「×川△郎」「ハイ」次々と名前が読み上げられ、私たちの列と離れてゆく。何のための呼出しだろうか？ 列の中のさきやきが始まる。皆目わからない。「村中正人」「ハイ」日本兵ばかりの切羽長で、炭鉱幹部より信任の厚い班長が呼ばれる。列の動揺が一段と激しくなる。民主主義の反動者が指名されていたとの感がなくなる。ハラシヨラポーターの村中さんが呼ばれたためである。

「高○×郎」「ハイ」驚きの余り、声が出そうな衝撃を受ける。「×本△夫」「ハイ」憲兵隊と一緒に勤務

し、上司と仰いだ人たちの名前が呼ばれている。

先に呼ばれた老兵たちは元満州国政府の高官か？ 警察関係の者か？ 憲兵隊出身者は終戦時、憲兵腕章を捨て憲兵襟章をもぎ取り、一般兵として他部隊に潜り込み、お互いは身分関係を熟知しているが、齊々哈爾で作業大隊を編成した時には大隊長はじめ、他の将校も無知のはずである。それ以来、身分秘匿には細心の注意を行い、関係のある言葉、文字さえ留意に留意し、身分の隠匿に全員が協力し、今日まで来たはずである。軍隊の階級を捨て、収容所に入所以来、一番先に敬称も「○○さん」と呼ぶようにしたのも、何のためかわからない状況に追い込まれる。

収容所側は、どうしてこの身分関係を把握したのか？ 密告か？ 誰が？ なぜ？ 疑問が疑問を呼ぶが、考えている時間がない。いつ自分の名前が呼ばれるかわからない。憲兵兵長以下の者の顔も青ざめている。下士官、兵に関係なく一体となって勤務してきた仲間、戦友である。生死はいつも一緒である。

次々と名前が呼ばれている。齊々哈爾特務機関勤務

の者の名前が出てくる。「以上呼ばれた者はこの貨車に乗って下さい」と氏名の呼出しが終了する。まずホッとすると同時に、周囲の集団の顔を一人一人確認してゆく。呼ばれた人たちは、一体何のための隔離なのか。

収容所に入所以来の言動とは思えない。労働における反動はない、反対に良く働いた方だ。民主主義と叫ぶが入所以来一度もそんな教育もなく、資料図書への配付、貸出しもない。あるとすれば『日本新聞』だけである。原因は一つ、終戦前の身分関係だけであると、私たちにだけわかるのはそれだけである。他の捕虜には、なぜあの人たちだけが呼ばれたのか、不明である。

そんなことより、列車に早く乗ってダモイが本当か、本当でなくても、動く貨車に身を任せたい気持ちがいっぱいである。

監視兵の「ダワイ」の一声で捕虜の乗車が始まる。私の貨車は、特別に指名された貨車の隣の貨車である。乗車の際、隣の貨車の記号等、特徴を頭に入れて

おく。一貨車、約五十人の乗員。二段棚の車内は入ノ時と同様であるが、車内の雰囲気が違う。和やかであり、各人の顔色が明るく、話題にもトゲがない。

何時ごろだろうか？ゴトンの音と同時に貨車は動き出す。車内で「ワッ」と声にならない歓声が沸き上がる。後は運に賭けるしかない！どの方向に向かって走っているのか、車内では不明である。小さい窓が片側に二個ずつあるが、見られるのはそこに割り当てられた兵だけである。早くも横になり、話は故郷へ飛ぶ。先に出るのは家族のことであり、次に、うまい物ばかりが話題になる。

精神的なものか？安堵心か？眠い。睡魔が襲う。反面、隣の貨車に指名された人たちのことが気にかかり、安眠を妨げる。頭の中で何か不明の葛藤が渦を巻いて、憲兵隊の上司の顔が入り交じり浮かんでくる。不安が頭に持ち上がる。貨車はただただ走っている、やがて闇が来る。よくしゃべっていた兵も、さすが疲れがきたのか、鼾いびきが聞こえるようになる。安楽である。

貨車は真つ暗い広野を走り続ける。気がつくとも停車している。走る、止まる、そんな繰り返しの中、薄明るくなって夜が明け始める。朝食用に停車した駅の端で、気になって隣の貨車を見る。ない。確かに覚えていた記号の貨車がない。間違つたかな、と思ひ返すが、記憶の記号には間違ひはない。貨車が違うのだ、なせだ、どうしたのか。

安堵と緊張した精神の疲れ、指名より除かれた安心感等、いろいろな短時間に起こつた周囲の心の痛手に、乗車時の張り詰めた心の緩みが睡魔に侵され、眠りに陥つたのが不覚。気がつけば夜明け。その間、どこかの停車駅で貨車の連結が外され、指名者を乗せた貨車一両が、ダモイ列車と別れて他の線路に移行されたことが濃厚となる。

興安嶺の憲兵隊新拜命より終戦、ソ連抑留、シベリアでの炭鉱作業と苦業を、生死を共にして生き続けてきた上司の方々に、物言わねど顔を合わし、せめて目礼でもと思ひしに、知らぬ間の別れとなつたことは返す返すも残念至極で、四冊の兵の喜びの声も遠く、一

人、ただ一人瞑想に入る。

貨車は間違いなく東へ東へと走る。単調な車内は話題も途絶え、横になる者が多くなる。走行中、沿線で作業中の日本兵の姿もチラホラ見える。手を振る元気な姿に一安心する。

出発して何日目か、バイカル湖を見る。入ノ時、バイカル湖を見た折は、果てしないシベリアの果てまでよく来たものぞ、との感があつたが、今バイカル湖を西から東へ走る貨車で見るとき、青く澄んだ湖面を眺め「美しい」の声が出る。嬉しさと心の余裕である。

十日余りも貨車の旅を続けたが、夜半、大きな駅の外れに停車する。明るい電灯が連なり、遠く都会の明りも輝いて見える。都市だ。「下車」の命令が下る。荷物を貨車に置いての下車命令である。最早失う物は何もない。「帰国前の入浴だ」と誰かが囁く。監視兵と通訳の声が飛んでくる。久方ぶりに五列縦隊を組み歩き出す。五分も歩くと大きな建物に入れられ、まず被服の消毒のため真つ裸になる。着ている物全部を縄に吊るし、次の部屋に行くとシャワー室である。広い

部屋に天井よりシャワールの蛇口が並んでいる。百人くらい一度に収容できるほどの広さである。シャワーを浴びるのも号令である。「始め」「終わり」で、シャワールの湯が出て、止まる。要領の悪い者はただ湯を浴びるだけとなる。浴室を出ると燻蒸消毒された被服が待っている。体も心も洗い流したサッパリとした気持ちで熱いくらいの被服をまとう。気持ちちはやる。

整列をする傍らに日本人らしい姿を見るが、監視兵が傍におり、言葉をかけることもできない。貨車に戻るとハバロフスクだとわかる。炭鉱街チャイナゴールスカヤを出て幾日になるか？ 初めての長時間下車と入浴のおまけつきである。

炭鉱街を出発後、ノロノロ走るかと思えば、駅でない広野に一時も停車していることがある。大きな駅では余り止まらない。食事の配分の時も、止まるのは野原の真ん中である。食事当番が給食車に車両分の給食をもらいに行く。配分して、給食用の容器をまた給食車に返納に行く。その間、貨車は止まり続ける。この時間帯が兵の用便の貴重な一刻となる。余り遠くへ

行くと監視兵のマンドリンが鳴る。貨車を中心に約一〇メートル位の草原に列をなしてしゃがむ姿が見える。戦時中、苦力クワリの輸送で見た光景と同じである。出る物と構わず、恥ずかしさもない。

車中は相も変わらず美味い物、各地の名産の自慢話で尽きることなし。次々と名物が出てくる。よく飽かないものと思うが、自分もいつの間にか話の中へ入っている。

終着駅ナホトカに着いたのは四月二十日である。途中下車―収容所へ入所等の予想外の事故もなく、捕虜一同、心で祈る帰国への第一歩である。ナホトカ港に着いたのである。

十七、ナホトカ収容所―ナホトカ港出港

ナホトカ第一分所に収容される、ここの収容所は全部天幕舎である。テント幕舎である。収容期間が短いせいか、また捕虜帰国の出港に間に合わなかったせいか、これから春夏の良い気候でテント生活も可であるが、冬季の収容所は敵しいだろうと想像する。

作業は軽作業で、荷物の運搬、給水の水運び、排泄物の処理等、それも交代での作業、余り苦にならない。体を慣らすにちょうど良い。

民主主義教育が始まる。一日約一時間、テント内で座って講話を聞く。講師は同じ捕虜、共産主義の高等教育を受けてきたような経歴はないようで、ただ単に説得力があり、口話術が上手であるというだけである。皆、慎重に、なるほどという顔をして拝聴している。反論でもしようなものなら反抗反論者として、すぐまた他の収容所への逆送が待っている。「さわらぬ神にたたりなし」「馬耳東風」、これが今の処世訓である。「ハイ」「ハイ」とわかったような顔をする。

使役に出てテントに帰る折、偶然にも博克図陸軍病院院長 重松軍医（九大医学部出身と聞く）に会う。階級章を外し、腕に赤十字の腕章を巻いている。双方、ハッとして目を合わすが、当方から右人差指を口に当て、目礼してすれ違う。重松軍医は洒脱な医師で、夜一人で料亭で遊ぶときは必ず憲兵隊に電話をかけ「夜勤のない暇な下士官は誰でも良い、遊び相手を

してほしい。今、〇〇亭におるから、私服で二―三時間一緒に話し相手をして下さい」と丁寧な電話が来る。当直下士官はすぐ、退屈している下士官に連絡をとり行かせる。また憲兵隊員も常時、体がだるい、風邪を引いたと陸軍病院の世話になり、お互いに顔見知りである。やっと帰国を前にしてのナホトカ、身分が発覚すれば芋づる式で他の人にも迷惑をかけるは必定、話したいことは山ほどあるが、グッと我慢してすれ違う。

ナホトカ収容所には第一分所、第二分所と第三分所まであり、第一より逐次移動して、第三分所―乗船―帰国との段階がある。そのテントは今満員である。内地よりの引揚船の配備が悪く、乗船を待つ者が溢れ、奥地よりの収容を待機させている、との情報もあり、せっかくここまで来て、いつ帰国できるか不明との悲観論も出る。

民主主義教育も、団体指導から個人教育へ移行する兆しが顕著となる。ソ連残留者を募り出し始める。「日本全土は戦災のため焼け野原と化している。帰国

しても家はなく、家族等も離散している。食糧難で食べる物が無い。芋のつるや野草を食べている。食品はあっても高価で買えない。街には失業者が溢れ、犯罪が多発している、等々。その点、ソ連は何もかも恵まれている、君たちが知っている通りであり、もし万一残留を希望するならば、当分ここナホトカで給食係として勤務すれば良いだろう」と説得する。また、爽やかな口舌に迷う者も出てくる。余り露骨な反対を唱えたり、内地はそんな悲惨なことではない等、意見を吐くと反動分子と睨まれる。怖い、自分の身に何が起ころかわからない。○○主計軍曹が残留の意志表示をしてテントを出て行く。

五月一日、メーデーをナホトカで迎える。各テントより○○人参加のこと、と指示があり、その一員としてメーデーに参加する。

先頭は軍楽隊。ラッパと大太鼓、小太鼓の賑やかな伴奏の中、プラカードを持った者、横断幕を持った者、全員赤い鉢巻姿、意気が上がっているのか？ 元気に頑張っているのは先頭の者たち。後はお付き合

い。ダモイが頭から離れない者である。

各テントとテントの間を巡り始める。テントの傍を通る時は、テント在住者は拍手をもってこの行進を迎え、送り出す趣向。メーデーの歌も長い行列で一致せず、声にも覇気が見られない。先頭の指導者、幹部等が後退し、行進状況を見に来る。その時は各人、馬鹿デカイ声を張り上げて神妙な顔をして合唱する。収容所の広場にて民主主義礼賛の講演があり、解散する。確かこの日の昼食はごちそうが出たと思うが、何が出たのか思い出せない。

漸次、引揚船が入港し、捕虜が乗船して帰国しているのか、第一分所より第二分所を飛ばして第三分所へ移動する。帰国が早くなったような錯覚を起こす。

毎日毎日、テントから何人かが軽作業の使役に出てゆく。このころの皆は寡黙である。失言、放言でもあり、密告でもあると帰れなくなるばかりか、また奥地のラーゲルへの送還が待っている。誰が密告するかわからない、隣に寝ている友も乗船するまでは信用できない。当たり障りのない、美味しい物の話の方が無難で

ある。

五月十七日、「作業なし。全員、荷物をまとめテント前に集合」の指示が出る。いよいよ乗船、帰国ができる、皆の顔が一瞬パッと輝く、喜びの声があがる。持って帰る荷物なんか何一つない。着たきり雀である。

今までの乗船者の経過、経験、伝言等により、手帳、雑記帳、何でも書いた紙片等は乗船の際全部没収され、あるいはその記事により乗船できない者もある。それ等の物を持っている者はこの場で捨てなさい、と穿つたことを言う者がおり、全員もう一度荷物を点検する。そんな物は何一つない。入ソ後、文字を忘れたように書いたこともない。また書くペン、紙もない。捕虜とはそんなものだ自嘲する。

行進が始まる、帰国への第一歩である。まずマストが見えてくる。大きな煙突より黒い煙が吐き出されている。美しい日の丸の旗が鮮やかに目に入る。紛れもなく日本の船である、デッキに立つ日本の船員の顔も見える。白の清潔な看護服を着た女性が目に飛び込ん

でくる。終戦後初めて見る日本女性である。棧橋がかげられ、ソ連将校、収容所幹部、捕虜側幹部が並び、荷物の点検があり、一人一人名前が呼び上げられる。

呼ばれた者は恐ろしいほどの速さでタラップを駆け上る。呼び戻される恐怖心が胸のどこかにあるからか？次々と名前が呼ばれてゆく。私の番が来る。名前が呼ばれる。「ハイ」。名簿と顔、荷物を見て「よし」。正に天に昇るような気持ちとはこの時のことか。駆け上ったタラップの長さも何もわからない。先に乗船していた戦友がしっかりと胸で私を受けとめてくれる。

涙が出る。涙、涙である。ナホトカに來た憲兵隊員全員、一人の脱落もなく乗船できたことは誠に幸運であり喜びである。が、船が出るまで油断できない。いま暫くの自重が必要であり、各人も周知のことである。

何度も船旅をして、港を出る時のドラの音、郷愁、哀愁を帯びた別れの、刻一刻と岸を離れる船体。流れる川のようなテープの別れもあった。いつも甲板に立ち、見送りの人と笑顔で別れを告げていたが、今度ばかりは別である。ウカウカ甲板に残り、残留者との別

れを惜しんでいて、「おい、彼は関東軍に勤務していた憲兵ではないか？」と指摘でもされたら、今までの苦労も水の泡である。そこそこに居住区である船室に下りる。

一刻も早く出港してほしいと祈るだけである。横になり目を閉じ無我の境に入る。

「オーイ船が出たぞー、内地へ帰れるぞー」と誰かが叫ぶ大きな声が聞こえてくる。「万歳！ 万歳！」の声も船内に響き渡る。船は確実に日本へ向かって進んでいる。

船長の「皆様、本当にご苦勞様でした」のマイクが流れる。復員兵からは何の反応もない。皆、横になるか、座っている者は頭を抱え、内地へ帰る喜びを噛み締め、思いは早くも故郷の父母、妻子に馳せ、涙をいっぱい溜めた者もあちこちで見られる。

この喜び、この胸中、五十数年経た今も鮮明に浮かんでくる。

蚕棚のような寝床は横になるだけの面積で、用便を済ませ帰ってくると場所がない有様。足を踏み込み、

人と人を割って、やっと横になることができる。船酔い者を除く元気な者は船中の散歩を楽しむようになる。掲示板には全国の地図が貼られ、戦災に焼けた土地は赤く塗り潰されている。悲喜こもごもである。

なぜか船中における給食は二食である。懐かしい米による久方振りの白い御飯、味噌汁、漬物、美味い物より一番恋しかった食物であるが、量は少量である。家に帰れば好きな物が腹いっぱい食べられるという期待感がある。シベリアでのあの飢餓、重労働、酷寒等の苦勞は今一刻忘れ去り、思うは郷土の山川、茅屋（まぐら）、一家団樂の食卓ばかりである。

食べる、眠る、喋る、これ以外船内ではすることがない。船は休まず機関の順調な音を立て、日本海を日本に向け、間違いなく一步一步近づいている。

船中二日目。「オーイ、日本が見えたぞー」の大声に我先にと甲板へ上がる。風の静かな青い海にポッカリと島が見える。懐かしい緑の木々、赤茶けた土地の色、民家はないが間違いなく日本領土である。やっと帰って来た。乗船時とはまた違った感がある。船は静

かに島々を左右に見ながら湾内へ進んで行く。

波止場の見える湾内で船はまず錨を下ろす。艇が船体に横づけされ、米軍人と共に日本係員が乗船してくる。どのような指示、連絡があつたのか、船内マイクで「上陸は明朝より」と放送される。

十八、舞鶴港上陸（内地への第一歩）

飢えと重労働の二重苦により骨の目立つ痩せ細った体に、左右より唯一の財産である飯盒を入れた雑囊、右肩より水筒を十文字にかけた姿で船を下り始める。

船を下りた復員兵は顔を引きつらせ一様に驚く。棧橋を囲んだ人々、人の垣。大きい白布に大きい文字で、各人の氏名を書いた幟、幟の列。氏名を書いたプラカードを持った人の列。復員兵の歩く一メートルくらい細い道の両側は、そんな人たちの列、垣である。

大きな声で「○○を知りませんか?」「××県の○○をご存じの方はいませんか?」「××部隊関係の人はおりませんか?」「教えて下さい」大声が四囲より

飛んでくる。かれ果てた声である。老若男女、大きく書いた氏名の幟の傍で、白髪のおばさんが涙で訴えている。復員兵の方が泣きたいような行列、行列である。一人一人確認している時がない。立ちどまり、また駆け足で行き過ぎる。悲哀の中をやっと通り過ぎる。

DDTの白い粉の洗礼を受けて宿舎に入る。懐かしい畳の感触を味わい、横になり目を閉じる。嬉しい入浴の指示がある。木の湯舟に浸り、シベリアの汗と垢を落とし心機一転、やっと日本に体が落ち着いた感を深くする。入浴後裸になり、肌着、下着等全部を洗濯する。私一人だけでなく、多くの兵の姿がある。シベリアで身に付けていた衣類も、体と一緒に清める意味である。

上陸第一日目は何の行事、指示もなく、皆一様に畳の上でのゴロ寝で時を過ごす。

翌日より復員手続のための面接等が始まる。「皆様、長いことシベリアの生活、重労働、ご苦労様でした。ここは日本です。皆様の体、身分等は保証いたします

す。何も隠すことなく今までの経過を明記して下さい。所属部隊、兵科、階級等の秘密事項は日本の終戦によりありません。全部正直に申告して下さい。何も心配することはありません」と繰り返しの説明がある。

一隅で集まり説明を聞いていた私たちは、その言葉、内地という認識の下、憲兵であることを申告することに意見が一致する。

「齊々哈爾憲兵隊 憲兵伍長」と名乗るとさすがに係官が驚き、「憲兵の身分の方がよく戦犯にならず船に乗りましたね。関東軍からの初めての復員です。まして下士官の方がよく帰って来ましたね。ご苦労がたくさんあったことでしょう。貴男方が憲兵としてシベリアからの復員第一号です。ご苦労様でした」と簡い言葉^{ねまろ}をいただく。憲兵下士官三、四人、兵長以下十数人と記憶する。

翌日、早速米軍MPの取調室へ出頭させられる。二世の米軍将校が数人の部下と共に机を囲み、シベリアの大地図をいっばいに広げ、尋問が始まる。米軍の欲

しいのはシベリアの軍事施設の詳細である。収容所付近で見かけた軍人の様子、個人が集団か、飛行機は飛んでいたか、帰国に際しての鉄道沿線で見たすべての工場、建物、軍事施設と覚しい建物等の一つ一つ思い出して話して下さい、と執拗なまで時間をかけて問われる。同じような建物がずらりと並び、復員兵の中から抽出して尋問しているようである。

二日間、米軍にソ連情報を聞かれるが、炭鉱作業の穴蔵生活、不満足そうな米軍将校も諦め、解放してくれる。

政府から現金三百円、乾パン二日分、国鉄の切符の三点を受領し、いよいよ明日、各人の故郷へ帰る。夕食後は、生死を共にした戦友同士が畳の上に輪をつくり、苦しかったシベリアの労働、楽しかった軍隊生活の思い出、将来の希望、抱負等を語り合い、最後の一夜を一睡もせずに名残を惜しむ。

翌日、列車の時刻表に基づいて北海道、東北方面の者、九州、中国方面の者等、地区別にそれぞれの列車の都合に合わせて出発してゆく。今度、いつまた再会

できるか、悲しみと、肉親に間もなく会える喜びの立ちである。

シベリアの白い広野の果てに、肉親と故郷の夢を見たまま斃れた、幾百の同じ収容所の戦友の御魂の安からんことを祈って、この筆を擱きます。「合掌」

あとがき

炭鉱街出発時、指名されて別の貨車一両に乗車した人の中で、憲兵隊の上司だった人たちの復員は昭和三十年にも及んだ。

後日の報道で、私たちの乗った復員船の幹部が、復員兵に支給する糧秣を横流ししていた犯罪が発覚、逮捕されたとある。船中で朝夕の二食支給はこの船だけであったと聞く。

憲兵なるが故に「公職追放令」に該当し、復員後、県庁事務職試験に合格するが、身元調査により「不適当」と不合格になる。その後、県警察本部書記試験があり、書記ならばと受験、筆記試験で合格するが、駐在所の巡査による身元調査の結果、「公職追放令」に

該当すると、不合格になる。その後、体の不調があり、二年ほど静養、職を転々とするが、公共職業安定所の斡旋により私立病院の事務職として勤務、約四年勤続する。

現在七十八歳、健康、趣味・ゴルフ

終戦時 齊々哈爾憲兵隊 博克圖憲兵分隊勤務 憲

兵伍長

略歴書

大正十一年十一月一日、父 清吉、母 とくゑの一女八男の末子として和歌山市に生まれる。

父 清吉は和歌山地場産業の建具商を営み、大正十二年の関東大震災で財をなしたという。末子のため父母に寵愛され、小学校では常に一―三番と優秀で、スポーツにも秀でた生徒であった。母が五年生の夏、父が六年生の師走に相次いで死亡、長男の下で一変した生活となる。

旧制中学進学を諦めるように説得されるが、陸軍幼年学校の受験を承諾して貰い、一次試験に合格するも

結果的に失敗する。精神的に、また肉体的にも疲労困憊し、昭和十二年三月義務教育終了後、無為無策に暮らす。

昭和十三年四月、満蒙開拓青少年義勇軍の隊員募集を知り、まずその名称に憧れ、満州に骨を埋めんとこの決意で応募、二カ月後、渡満。北満の原野開拓、酷寒、初めての集団生活に幾多の辛酸を味わい、人生の糧とする。

昭和十五年早春、全滿訓練所より選抜された優秀隊員一同と、准幹部選抜試験を受け合格、郷土部隊小隊長として帰郷する。

県庁職員と映画班を帯同して、県下約一〇カ所に隊員募集の講演会を開催、義勇隊訓練所の偽りのない日常生活、訓練等話しかける。

昭和十五年三月、募集に応じた和歌山県隊員約五十人と県庁に集合、その小隊長として引率し、内原訓練所に入所。滋賀県、香川県と三県で中隊を編成(約三百人、六個小隊)、渡満、嫩江訓練所に入所する。

昭和十七年 徴兵検査 甲種合格

昭和十八年一月 関東軍第五国境守備隊入隊

以下略

【執筆者の紹介】

坂本清次郎氏は、大正十一年十一月一日生まれ。

和歌山市北新町で家具商の父 坂本清吉、母 とくゑの一女八男の末子として父母の寵愛を受け、小学校では常に一―三番と優秀で、スポーツにも秀でた生徒であった。

五年生の夏に母を、六年生の冬に父を相次いで亡くし、長兄の家に寄宿、中学校進学も諦め陸軍幼年学校に挑んだが、一次合格のみで失敗。

昭和十二年三月、義務教育卒業。失意にうちひしがれ、毎日悔し涙に沈んでいた。

昭和十三年四月、満蒙開拓青少年義勇軍の隊員に応募し、二カ月後に渡満、原野開拓、酷寒、初めての集団生活で幾多の辛酸を味わう。

昭和十五年、准幹部に合格し郷土部隊小隊長となり、和歌山県の約五十人を引率して内原訓練所に入

る。

その後、滋賀県、香川県、和歌山県で中隊を編成、渡瀨、嫩江訓練所に入所する。

昭和十八年一月、現役兵として第五国境守備隊に入隊し、七月一日、憲兵下士官教習所入隊。

昭和十九年四月二十日、卒業。

ハイラル憲兵隊勤務で興安嶺の守備に当たる。

二十年八月一日、齊々哈爾憲兵隊免渡河分遣隊所屬。

八月十五日終戦を知り、齊々哈爾に集結して武装解除の後、作業大隊に編入され列車輸送。九月二十七日に炭鉱地へ到着し採炭作業に従事し、辛酸を重ねた上、ノルマ達成をして、二十二年、引揚げ第一号と言われて帰国した。

憲兵なるが故に公職追放令にかかり、県職員も県警書記も挑戦し、試験合格後に欠格とされた。

体調を崩し二年間静養し、転々と職を求めた上、公共職業安定所の斡旋により私立病院の事務長の職を得て四十年勤務をし終えた。

現在七十八歳。健康でゴルフを楽しんでいる。

軍人一族のほまれ高い家で、二、三、四男は夭死、長男 歩兵、五男 航空兵、六男 砲兵、七男 輜重兵、八男 憲兵、と五人が全員軍務に服し、無事復員した強運一家です。

(和歌山県 林 三子雄)

激動の青春

島根県 塚田 信雄

まえがき

私の青春は、思い出に残る在満生活と、悪夢のように思い出したくないシベリア抑留に二分される。戦後生まれが過半数に達している今日、戦争のことは世代交代とともに風化されつつある。そこで私は、二度と戦争をしないためにも、言葉だけでなく小冊子にして数年前から、心ある人の求めに応じ配付している。そこで、開戦から抑留初期の出来事は、前三回投稿した